

ユニテ

UNITÉ 31



財団法人 ロマン・ロラン研究所

2004. 4

目次

ピエール・ジル・ド・ジエンヌ教授講演会

戦争と平和を考える

— プリーモ・レーヴィを語る ……………

ピエール・ジル・ド・ジエンヌ …………… 1

訳注 西成勝好

ロマン・ロランを読みながら、今の世界を考える …………… 峯村泰光 …………… 20

ロマン・ロランの作品による音楽とレコード …………… 尾埜善司 …………… 41

ロマン・ロラン日記の周辺と出版事情 …………… 宮本エイ子 …………… 60

『京都・半鐘山の鐘よ 鳴れ!』（宮本エイ子著）を發行 …………… 編集部 …………… 68

ロマン・ロラン研究所の活動・設立趣意書	74
二〇〇三年度 賛助会員、寄付者名簿	79
短信・あとがき	80

戦争と平和を考える

—— プリーモ・レーヴィを語る

ピエール・ジル・ド・ジエンヌ

訳注 西成勝好

皆様、今日は本当にお越しいただきありがとうございます。私が、初めて京都に来たのは一九六一年のことですが、皆様方の多くは、まだ生れてなかったと思います。

今日私がお話しします、プリーモ・レーヴィという人には会うことができなかったのですが、非常に敬愛している人物です。プリーモ・レーヴィはイタリア系のユダヤ人で、一九一九年にトリノに生れ、一九四四年に大学（化学専攻）を卒業しました。

第二次大戦の頃は、ナチスのために危険が迫っていることを常に感じていました。最初彼が働いたのは小さな化学系の企業で薬品などを造っている工場でした。彼は、一九四四年ナチスに捕まりアウシュヴィッツ強制収容所に連行されました。彼は化学者なので役に立つだろうとナチスが考えたこともあり、救われました。ソ連軍によりアウシュヴィッツの強制収容所が解放された後、イタリアに帰るまで六ヶ月かけてヨーロッパを横断するという、長い旅をしました。

その後、ペンキ会社で働くようになりました。最初はたいした職務ではなかったのですが、だんだん重要な任務につき、化学部々長となり、その後その企業の社長となりました。イタリアに帰った時に、婚約したのですが二年間結婚を待たなければなりませんでした。それは、非常に貧しかったからです。

イタリアに帰って彼は、自分の経験をカフェやいろいろな場所で行っているいろいろな機会に語るようになりました。その結果生れた本が先程、西成先生が紹介された(『アウシュヴィッツは終わらない』という日本語訳(竹山博英訳、朝日新聞社、一九八〇)なのですが、フランス語では)『Si c'est un homme』、『これが人間であるのか』というタイトルです。この本は大変感動的なものです。プリーモ・レーヴィが友人のニコロといっしょに寒さの中を強制収容所に入られている人のためにスープを長い距離運ぶのです。ニコロの方は元気がないのですが、プリーモ・レーヴィの方は元気を出そうと思ってダントの『神曲・地獄篇』を引用し始めます。それをきっかけに二人は別の世界のことを夢想しはじめます。

非常に残念なことです。私はプリーモ・レーヴィに会うことはなかったのですが、友人のニコロ(彼は今でも生きていますが)に会うことができました。非常に感動的な出会いでした。

その体験を語っている本ですが、中に詩も出てきまして、彼のエスプリを良く表していると思いますので、その一部を今日ご紹介することにします。

「暖かい家の中で静かに暮らしているあなた

あなたは家に帰ると食事の準備ができていて 友達が待っている

そんなあなたに考えて欲しいのです

これが人間でしょうか?

泥の中でのたうちまわり 休息というものもなく

ちょっとしたパンのために戦い ちょっとしたことで死ぬ

そうした男 それが人間でしょうか

考えてください それが女でしょうか

名前を失い 髪も失い

思い出す力さえ失ってしまった女性

うつろな目をして 冷たい胸をして

冬のカエルのようなそんな女性 それが本当に人間でしょうか」

その後の数年間にわたっても、アウシュヴィッツでの体験に関する本を書き続けたわけですが、その後新しいジャンルを発見するに至りました。それは、化学者だった若い頃の時代に関する短編を書きはじめたものです。

その結果生まれたのが、非常に有名な短編集『周期律』で西成先生からもお話があったと思います。この本の一部をご紹介しますことで、こういった目的で書かれた本なのかご紹介したいと思えます。友人に話しかけている設定なのですが、

「私は友に言ったのです。自分と他の同僚に起こったできごとについて語りたい。それを本の中で語ることで、専門家でない人間に、自分の経験、非常に強くて苦しい化学者という仕事の経験について語りたい。

化学者という仕事は、非常に特殊な経験であり、同時に生きている人間のしているきびしい仕事の一つの例だと思ふ。というのも私は不公平だと思うからだ。世界の人々が他の人間の生活を知っている。例えば、医者だとか、娼婦だとか、水夫だとか、殺人者だとか、古代のローマ人だとか、それから策略家とか、ポリネシアの人間とか、そういっ

た人間の生活は世界の人々に知られているのに、我々、物質を相手に働いている、物質を変化させる化学者の生活が知られていないことはおかしいことだ。そこでそれを本にしたいと思うのだけれども、その際に自分としては、大きな研究所でおこなわれている研究に関して語るのは避けようと思う。というのも、そういった研究所でおこなわれている研究はグループの研究で、匿名性の高い研究だからだ。

私が語りたのはそうじゃなくて、孤独に活動する化学者の話で、そういった化学者というのは、無力で、人間レベルの活動をしていると思うのだ。それは、自分自身の話でもあるし、また化学を打ち立てた人間の話でもある。そういった人間というのは、時代の無関心にもかかわらず、一生懸命研究を続けていたわけで、グループ研究などはないなかった。もちろん、報酬もなかったし、たった一人で、理性と創造力だけを味方にして自分の脳と手を使って物質と格闘していた。」

ブリーモ・レーヴィの小説に出てくる人物についてお話したいと思うのですが、そこでは、化学者が体験する苦悶、不安が非常にうまく描かれていると思います。その登場人物の一人に化学者のランザという人間がいますが、彼は夕方になると自転車で研究所にやってきて、そこで一晩中、この会場くらい大きな反応槽を使って、非常に難しく微妙な合成反応という研究をおこないます。

こういった合成反応というのは非常に難しく、温度や圧力などの条件に細心の注意をはらって、様々な物質を導入しないといけませんし、ちょっとした間違いで大きな石が生じてしまって、そうするとドリルを使って取り出さないといけませんし、また別の間違いをすると、毒物や毒ガスが発生したり、あるいは爆発が起こったりします。

このランザという人間は、非常に体系的に研究、実験を進める人でありまして、反応装置のことも良くわかっているので、研究はうまく進むわけです。しかし、朝方近くになると圧力信号がおかしくなって、大きくなり過ぎて当てにならなくなる。そうなるともうお終いで、どんな対策を講じてもうしようもなくなりました。

こうした瞬間は本当に一瞬のこととして、ランザはもしかしたら死ぬかもしれないということ、良くわかっています。それで、逃げる時間はまだであると、その時に非常に大きな苦悩を体験するわけです。「どうしよう、どうしよう」と考えます。それで、なんとか対策を見つけて生き残ることができたわけです。

そういった一夜を過ごした後、彼は朝早くまたみじめな姿で、自転車で帰って行くわけです。

こういった、非常に緊張した経験を多くの化学者たちが私に話してくれました。くつろいだ時間とか、疲れた時に、こういった話をよく聞きました。

ブリーモ・レーヴィの作品を読みますと、化学者が必要とする、勇氣、忍耐、観察力がどういったものであるかが、良くわかります。

ある一つの作品の中で、それはアンチヨビの話と呼ばれているのですけれど、登場人物はペンキ工場で働いていて、ある日そこで造っているペンキが不良品になって売れなくなりです。何ヶ月にもわたって、その原因を主人公は考えるのですけれども、なんとそこで雇っている家政婦の使っているぞうきんの、日に見えない木綿の粒子が入り混じっていたせいでペンキがおかしくなっていたことが判明しました。本当にまるで推理小説ですよ。

私は、ブリーモ・レーヴィに会うことはありませんでしたが、ブリーモ・レーヴィがどういった人であるかというイメージがあります。私の想像するブリーモ・レーヴィというのは、あまり話さない無口な人間で、人の話を聴く能力に恵まれていた人だったと思います。それは、彼の小説の中で、これは人里はなれたシベリヤを舞台にしているのですが、主人公のフォソンという友達の話が聴くのと同じイメージだと思っています。

私を知り合えることができる人間というのは限られているわけで、たとえ知り合うことがなかった人間の中にも、友達のような関係を持てる人間がいると思います。

私のそういった友達の話についてお話しします。例えば情熱の歴史家と呼ばれたミシュレがいます。また現代では非

常に有名な理論家、リチャード・ファインマン。彼はアメリカのノーベル物理学賞をもらった科学者ですが、日本の朝永振一郎氏も同時に受賞しました。彼にも会ったことがないのですけど、彼の本を二十一、二歳の頃に読んで、目が覚める思いがしました。

他にも数人の作家をあげることができます。例えば、フランスのジャン・ジオノー。彼は南アルプスに住んでいたのですが、私自身もそこで戦時中に子供時代を過ごしました。また、ブリーモ・レーヴィとなら、暖炉を囲んでいろいろな話をするのができたと思います。

例えば、私がブリーモ・レーヴィにしただろうという話の一つに、イギリス人の同僚から聴いたものがあります。

あるイギリスの南の方にある、洗剤工場での話なのですが、その工場でできる洗剤の品質が日によって違うという話になりました。調査の結果わかったのですが、使っている界面活性剤の質が満月の日に悪くなるということなのです。こういった話が新聞に発表された時に、我々の時代には新興宗教がはやっていて、いわゆる超常現象を好きな人間が多いのですけれど、こういった人々がこれを聞いてどのように想像したかは、皆さんの想像にかたくないと思います。

実はこれは、非常に簡単なメカニズムでした。この工場は海からそれほど遠くない所に建てられていて、そこで使う水は、実は井戸から引きあげられていました。なんとその井戸が少し海とつながっていました。そのために、満月の満ち潮の時には海の水が入ってきて、それが原因だったわけです。ブリーモ・レーヴィなら、この話をもとに非常に優れたすばらしい短編を書いただろうと思います。

ブリーモ・レーヴィと他には、彼の仕事と私の仕事の違いについて話したいと思います。彼の方は化学者なわけで、自分の仕事に関して難しいことを説明しようとすると、分子式を使うことになると思います。分子式というのは原子からなっているのですが、それはどう見ても非常に抽象的な図式にしかありません。なぜそれが、抽象的かと言いますと、その原子の図式を理解するには専門の知識がないとわからないわけで、そういった分子を造るのに、どんな困

難があったか、そういった分子が持っている可能性、他の化学物質やあるいはもっと複雑な、例えば我々の肺とか、腎臓とかと合わせた時に、その分子が持っている可能性といったものを知るためには、専門的な知識が要るわけです。そういった化学者の仕事というものは、私は彫刻家の仕事に似ていると思うのです。ただし、化学者の造る彫刻というのは、何年も勉強した後でないで理解してもらえないものです。

我々、凝縮系をあつかう物理学者の仕事はもう少し簡単だと思います。というのも、複雑な現象を説明するために、たとえばデッサンだとかもっと簡単なイメージを使うことができます。それは多くのほとんどの方に理解してもらうことができるからです。もちろん、そういったイメージを見つけるまでに、非常に時間がかかることもあります。たとえば十年かかったこともあります。これは、作家であるフリーモ・レーヴィが適当な言葉を探すのに時間をかけるのと同じことだと思います。ただ、化学者と違う点は、我々物理学者はこういったイメージを使うことによって、より簡単に理解を得ることができる点です。全体的に見てフリーモ・レーヴィの化学者の仕事と私たち物理学者の仕事というのは非常に近いものだと思います。つまり時間をかけて忍耐強い研究が必要なわけです。

我々化学者、物理学者から見ると、作品がわかりやすい人たちの仕事はうらやましいと思います。例えば、作曲家でしたら音楽、それから香水そういったものを作る人の作品は誰にでもわかるからです。だから逆に我々化学者、物理学者は自分達の仕事についてもっと話さないといけないと思います。フリーモ・レーヴィがすばらしいのは、自分の仕事に関する証言を残してくれた点です。われわれの子供たちが彼の作品を読んで、フリーモ・レーヴィの炎を燃やし続けることを私は望んでいます。ありがとうございます。

質疑応答

Q. ちょうどNHKで、しばらく前にフリーモ・レーヴィの番組があったのですが、その時の番組のテーマがフリーモ・レーヴィがなぜ最後に自殺をしたのが、大きなテーマになっていました。番組の最後まで原因は説明されな
いまま終わったのですが、もしド・ジェンヌ先生がなぜフリーモ・レーヴィがああいう最期をとげてしまったこと
について、お感じになられていることやお考えがありましたらぜひお伺いしたいと思います。

A. 理由はわかっていないのですが、事実としてわかっているのは、癌を患っていたというのが一つ、もう一つは世
界のなりゆき、世界のあり方に関する苦悩をつのらせていたということもあります。この二つが重なり合って自殺
ということになったというのが、私の意見ですが、確信はありません。

Q. さきほど、自分の研究において十年かけて、あるイメージを見つけたとおっしゃったのですが、どんなイメー
ジなのですか。黒板にぜひ書いてください。十年かけたそのイメージだと、誰にでもわかるとおっしゃったので、
ぜひ見せていただきたいと思います。

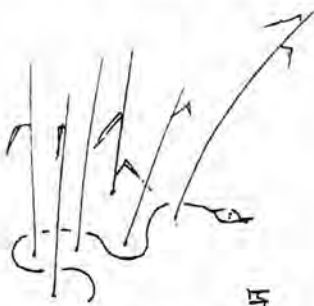
A. では、黒板が来るのを待っている間、他の質問に答えたいと思います。

Q. 先生が、彫刻に例えておられた、物理における、次の彫刻の傑作とは何でしょうか。次の大発見は何でしょうか。

A. そうですね。挑戦すべき課題はたくさんあって、まだ我々の力は足りないと感じています。その一つで、ぜひ日本のみなさんにやっていただきたい研究として、砂のメカニズムというのがあると思います。みなさんご存知のように、『砂の女』という有名な小説がありますよね。砂のメカニズムは、まだまだ我々にはわかっていません。これにぜひ挑戦していただきたいと思います。

ちょうど、黒板が来ましたので、絵を描きましょう。ポリマーとは高分子と言って、分子量が大きい、ゴムとかプラスチックなどの物質です。(注…こういうものについて先生は、非常に業績をあげられて、その謎を解き明かしたというのが、ノーベル賞の受賞理由の一つになっています。)

ポリマーをイメージとして簡単に想像していただくには、日本で食べるそば、からみあっているざるそば、ああいうイメージを持っていただくのが良いと思います。このポリマーの扱いにおいて、難しかった点なのですが、このポリマーから繊維を作る時に、小さな穴を通します。その時に、非常に高速で通すことで、繊維ができます。ただその時に、どういう動きをするのかということ、わかりにくかったのです。ここで、黒板を使うのが大事だと思うのですが、もう一つ、付け加えたいのは、溶解したポリマーというのは、そばが非常に熱い状態に似ています。つまりポリマーは動き回るわけなのですが、こういった動きであるのかを正確につかむのが難しかったのです。竹藪を考えていただくとわかりやすいのですが、蛇がこういふふうには、竹の間をぬって動いているの



竹藪と蛇 (ド・ジェンヌ作)

を考えてください。このイメージを良く頭に入れてもらうと、ポリマーの動きが、メカニズムがわかると思いますが、中国の四川に行った時のことなのですが、そこで繊維工場を見たのですが、今言ったような穴にポリマーを通して繊維を作っていました。そこを担当していたのが、上海出身の技師だったのですが、その技師に私がド・ジェンヌだと紹介されたのですが、その技師は私の仕事をちゃんと知っていて、ああこれを発明されたのは、あなたですねといわれました。もちろん、非常に誇らしく感じたことは言うまでもありません。

Q. その考察をイメージにするというお話なのですが、イメージにただで良いのでしょうか。それをもっと数学的に純粹化させるとか、それをもとに、考察のところにまた戻ってくるとか、そういうことをする必要はないのでしょうか？

A. 非常に良い質問です。私の仕事においては、最初の理解というのは、数学的な抽象的な理解からはじまるのですけれど、そういった理解をとおして、物事が完全に把握されているわけではありません。そこから、先に進んでイメージすることで、今までわからなかったことがわかるようになることもありますし、学生に説明するときもそのほうが便利だと言えます。逆に言いますと、ある現象があって、それを単純なイメージに還元できないうちは、まだ完全にわかっていないということが言えると思います。ただし、イメージを崇拝しすぎるきらいもあります。ここでエピソードを一つご紹介したいのですが、先日、名古屋である会合（高分子学会、ド・ジェンヌ教授はこの学会で特別講演をされた）が開かれて、一五〇〇人も人が聴きに集まりました。そこでわかったことは、日本の聴衆の方々は、ある一種の分子（デンドリマー）に非常に興味を持っておられ、この分子の図というのは規則的で非常に美しい形をしているのですけれど、その一連の分子の研究に日本の文部科学省がお金をかけています。ただ残

念なことに、私の考えでは日本の研究者が熱心に研究しているこれらの分子は、お金がかかりすぎるし、難しすぎて、まったく役に立たないものです。(注：名古屋で五月二十八日から三十日まで高分子学会がありました。プラスチックやビニールやゴムなどわれわれの身の回りで使われている多くのもの、そして、我々の体とか、動物も植物も生物はみな高分子からできています。蛋白質とか多糖類とかです。それで、日本の高分子学会というのは、非常に強力な学会でして、一五〇〇人も参加者があったのです。その中でデンドリマーといって枝の分かれたような分子ですね、これをいろいろ作ると、規則的に計画的に設計していくと、もう何でもできるといえるか、ものすごくいろいろな物ができるのではないかとということでプロジェクトが進んでいまして、それは巨大な予算を使っているんですけど、これをド・ジェンヌ先生は批判されたわけです。)

Q、ファインマンの著作に関して言及されていましたが、どの点がすばらしいと思われたのか、お話ししていただけますでしょうか。

A、質問者の方は、ファインマンの本という風におっしゃいましたけど、私がファインマンに出会ったのは二十歳の頃でして、その頃はまだ本は出ていませんでした。私が実際読んだのは、液体ヘリウムに関する二つの論文なのですが、その論文で普通見られるような計算ばかりでなく、非常に深い考察があったことに感銘しました。というのも、私はその頃受験学級で勉強していて、数式ばかり扱っていたのですが、少ない計算で深い考察ができるという論文を読んで、非常に新しい考え方に会った気がしたわけです。しかし、ファインマンは数学も非常に得意であったことも付け加えておきましょう。ここでちょっと紹介したいのですが、ファインマンは何度か日本に来たことがあるのですが、その時に彼がもらしたことに関する逸話なのですが、彼が出会った日本の科学者が口をそろえ

て言うには、我々日本の科学者は、西洋の科学者と協力して研究できることを非常に嬉しく思います。というふう
に言ったらいいのですが、それに対するファインマンの答えは、「それは良くない。同調してやるよりも、日本の
研究者は自分達の獨創性を持って、自分達の研究をもらった方が、世界全体の役に立つだろう」というふうに
言った。つまり、多様性が大事だと言ったわけです。こういった考え方も、私は非常にすばらしいと思います。

Q. プリーモ・レーヴィさんは、トリノのユダヤ人の家庭で生れたと聞きましたけれど、私はまだ彼の本を読んだこ
とはないのですけれども、彼の考え方に、アウシュヴィッツで生き残ったということもあるでしょうけど、ユダヤ
社会のユダヤ思想的なものの影響はあるのでしょうか。

A. それは、非常に興味深いご質問で、実はプリーモ・レーヴィ自身もインタビュに答えているのですけれども、
今は残念ながらそのインタビュは持ってきませんが、言えることは、そのユダヤ性というものに対して、プ
リーモ・レーヴィは近いと同時に遠くもあつた。両方の側面があつたと言えます。まず、宗教的にいうと
全くユダヤ教を實踐してはいませんでした。政治的に見てもイスラエルの国家に対して、ある程度の親近感を持っ
ていたけれども、距離を置くようにしていたわけです。ただ、文化的に見てそのユダヤの伝統と文化を非常に誇り
に思っていたわけです。そういった文化を通じてユダヤ民族というのは、種々の大きな不幸に打ち勝つことができ
たのですし、また、文化、科学の面で世界的な貢献を成し遂げたわけです。ですから、そういった意味で宗教、政
治の面ではそれほどユダヤ的であると、自分を感じていなかったと思いますけど、文化的には非常にユダヤ的なも
のを感じていたと思います。

Q. さきほどから、その考察とイメージの関係のお話がありましたけれど、逆の経験はありでしょうか。つまり世界を觀察していろんなイメージや動きや現象をもとに、そこから何か発見をするということはあったでしょうか。

A. 先ほどはイメージに表すことでより深い理解に到達できると言う話をしましたが、定量的にきちんと理解することとはもちろん大切です。名古屋大学の上井正男教授（二〇〇四年四月東大に移る）等が行ってきたような数学的に定式化していく扱いは重要なことです。

Q. 現在、イラクでの戦争がどのようなことになるか、フランスやロシアその他の国々がアメリカの単独行動主義を批判して、アメリカの一方的な先制攻撃に対して各国で反対運動が強く起こっていますか、先生はこの問題についていかがお考えでしょうか？

A. そうですね、実際イラク戦争が始まる前に、新聞のル・モンドに短い声明を発表したのですけれど、もちろんイラク戦争に反対するものでした。もちろん、サダム・フセインだけを見ると、彼は独裁者なわけで彼を排除する必要があるというのは、あたり前のことなのですが、ただし私の考えでは、戦争をやるとその問題だけは解決できるかもしれないけど、それ以外の問題を生むかもしれないと思っていました。例えば、パレスチナ内乱に近いような状態になってしまうと思っただけです。それで、パレスチナの人口は、一〇〇万人ですけれど、イラクの人口はその二十四倍なわけですから、パレスチナの問題の二十四倍規模の問題が生れることになると考えたわけです。しかも、イラク戦争のあと周辺の国、エジプトやヨルダンが態度を硬化させる可能性もあったわけで、そういった危惧を今でも抱いています。といったことで、私がル・モンドに発表した声明は、アメリカを批判するものでした。

「ド・ジェンヌ先生ありがとうございます」

ピエール・ジル・ド・ジェンヌ先生、ありがとうございました。

お話を承り、先生がすばらしい物理学者であられるばかりでなく、すばらしい詩人・画家であられることが判りました。只今やわらかなタッチで画かれた竹林のテッサンも見事と拝見しました。

先生は、へやわらかな物質「液晶」を研究なさっているようですが、先生は「へやわらかなころ」をお持ちです！
「先生、この時、口をはさまれる。」「ココロ、デスネ！」

はい、ココロです！

先生のご著作の一冊を西成先生が訳され、講談社ブルーバックスから出ています。「科学は冒険！」先生のすばらしい思想が示されていますので、訳文を数カ所選び、テーマを付けて読み上げること、お許し下さい。

一 日本への扉

四十年ほど前から、私は少しずつ「日出づる国」日本への扉を開けてきました。この国は、私にとっては上田成、井上靖、谷崎潤一郎、そして溝口健二、小津安二郎の国です。

私は、日本で桜の花びらから伊豆の踊り子の草履にいたるまで、多くのことを学びました。(一五ページ)

二 シャボン玉と日本画家

シャボン玉は美しく色鮮やかで、ふわふわと飛び回り、壊れやすいものです。このようなシャボン玉を子供に見せるのはなんと楽しいことでしょう。私が高等学校を巡って話をしたときに、シャルダンの絵（子供がシャボン玉で遊んでいる）とか、同じ時代の日本の画家、司馬江漢の絵（これは赤ちゃんが母親にしがみついてシャボン玉をつかまえようとしている）などをスライドでよく見せたものです。（一一八ページ）

三 硬い部分とやわらかい部分

壊れやすい物質は、私たちが未来の技術を考える上で不可欠な要素なのです。生命そのものの支柱ともいえるでしょう。しかし、ここでとくに伝えたかったことは文化への貢献です。この科学はまさに実践的で繊細で、相反するものをあわせもつというようなものなのです。

もう一度ここで液晶について思い出してください。そこには、ひとつの分子に硬い部分とやわらかい部分を同時にもちこたせるという秘術が尽くされています。（一四七ページ）

四 研究をおびやかす独裁者

研究においても、人間の他の活動と同様、独裁者による支配という危険性はつねに存在します。現在でも見え隠れしている幾人かの独裁者たち、たとえばイスラム原理主義、あるいはアメリカにおいて「政治的に正しい運動」を担う人たちにも、私は恐れを感じます。（一九八ページ）

五 テレビの教育プログラム

一般的にいうと、いわゆるテレビの教育プログラムというものは、最善のものも含めて、見ている人の精神状態を危険な方向に歪める可能性があります。それも、すべてのテーマについて、このことが当てはまります。たとえば、ロマネスク建築についてのテレビシリーズが私の心に浮かびます。カメラマンは、ヴェズレーにあるマドレーヌ大聖堂、とくに柱頭の詳細な部分を大映しにしていました。この詳細部はもちろん素晴らしいものですが、見ている人はもはや、自分の目で発見するためそこへ赴く必要がなくなってしまうのです。画像を与えられ、しかも作り手が注意深く選んだものを与えられることで、受け身になってしまうのです。(二二四ページ)

六 小学生と文字

フランスと日本の小学生を比べると、両者には決定的な違いがあります。それは、文字の書き方を学ぶことに関するものです。日本では小学校の六年間をかけて文字(漢字)を正しく書けるよう勉強します。しかし、この骨の折れる学習課程はハンディキャップになるところか、逆に、子供に基本的な「技術」——すなわち、「仕事をうまく成し遂げる醍醐味」みたいなもの——を発達させるのです。(二三六ページ)

七 机の上の法学教育

フランスの判事のなかで、学生として勉強している間に、法律学校以外の環境に身をおいたことのある人はどのくらいいるのでしょうか。国立司法学院によると、私の「他の環境での経験が不足しているのではないか」という問いかけに対して、学生たちは通常「夏期インターンシップ」を(とくに病院で)経験しているとのことでした。これは賞賛に値する努力ですが、与えられた場所と条件の下で働くことと誰の助けも借りずに船乗り専門のパー

働くこととはまったく次元の違う話です。(二四一ページ)

八 大学と自己批判

私が、言葉を選びながら自信をもって言えることは、「大学たるもの、真剣に内省に身をゆだねるべきである。そして、外部からの管理統制がどうあれ、きびしい自己批判に身をさらしていくべきである」ということです。(二六二ページ)

九 学生の顔が見える試験方法

学生たちにもっと成功率の高い経歴を得させる目的で、マン・ツィ・マン式のテストによって活力を与えることを提唱したい(現在行われている「指導学習」では、一人の学生が火中にいるのに、クラス全体はうたた寝をしているような状態なのです)。

たとえば、四人の学生が同時に四つの黒板の前にそれぞれ異なった問題と取り組んでいる情景を思い浮かべてください。(二七一ページ)

この先生のご本『科学は冒険!』、ぜひお読み下さい。

以上は、二〇〇三年五月三十一日、関西日仏学館における講演会(ロマン・ロラン研究所、関西日仏学館共催)での講演にもとづくものである。当日の通訳は夏目幸子氏が担当した。

ピエール・ジル・ド・ジェンヌ教授は、一九三二年パリ生まれです。磁性体や半導体などの転移現象と高分子や液晶における分子運動、転移の類似性を発見され、それまでの物理学では理解できなかった複雑な現象の理解への道を開かれました。

この「複雑系」の解明に関する業績によって、一九九一年ノーベル物理学賞を受賞されました。そのほか広い領域において画期的な業績をあげ、現代のニュートンと呼ばれています。

教授はノーベル賞受賞後フランス各地の高校に招かれ、科学的な知識、科学的なものの考え方、科学の楽しさ、科学者たちの悩みなどについて講演され、また、高校生たちと対話をしてこられました。ド・ジェンヌ教授の啓蒙書「科学は冒険！ 科学者の成功と失敗、喜びと苦しみ」（西成勝好・大江秀房訳、講談社ブルーバックスB121）は、教授が高校生向けに行った講演の内容をまとめたものです。

1 今回、第一回バイオナノインターフェイス国際会議の特別講演者として招待される

2 略歴

一九三二 　　パリ生まれ

一九四九 　　エコール・ノルマル卒業

一九五五 　　大学教授資格取得（物理学）

一九五五―五九 　原子力エネルギー庁

一九六一―七一 　パリ大学オルセー理学部教授

一九七一 コレージュ・ド・フランス教授

一九七六 パリ市立物理化学高等学院院长(二〇〇二まで)

一九九一 ノーベル物理学賞

3 超伝導、液晶、高分子についての著書はそれぞれ画期的な内容で、指導的な教科書となった。

4 フランス語圏で一五〇校以上の高校で科学の普及のための講演、これをまとめたものが「Les objets fragiles」である。日本語訳は「科学は冒険！」

5 科学と芸術の融合・調和について

白筆の画がリュクサンブール公園、ロタン美術館などの観光パンフレットに収録されている。

6 プリーモ・レーヴィを高く評価

化学の面白さ、戦争の悲惨さ

なお、コレージュ・ド・フランスは一五三〇年フランソア一世により創立された。パリのソルボンヌの近くの高等教育機関(今の日本で言えば、大学院大学)。常に当代最高の学者が教壇に立ち、講義は無料で一般公開、試験もなければ、免状も交付されない。シャンポリオン、ミシュレ、ルナン、ベルクソン、ヴァレリー、クロード・ベルナル、などが講師をつとめた。講義は一般公開だが、講義内容はきわめて高度で、聴衆の大部分は大学院生、研究者などである。

西成勝好(大阪市立大学教授)

ロマン・ロランを読みながら、今の世界を考える

峯村泰光

ロマン・ロランの一人の読者として、私はいまの時代について、考えていることや感じていることを、おもに戦前と平和の問題を中心にお話ししてみたいと思います。

二十世紀には大きな戦争が二度もありました。それはロマン・ロランが生きていた時代のことです。第二次世界大戦の最後にヒロシマとナガサキに原爆が落とされましたが、その前の年の暮にロマン・ロランは亡くなりました。

その後の半世紀あまりにわたる核の時代を私たちは生きてきました。そしていま、二十一世紀に入ったとたんに、イラク戦争が起こされ、最強国のアメリカによる「新しい戦争」の時代に、おたがい身をさらすことになりました。

そこで二十世紀最大の世界的なユマニスト、ロマン・ロランを読みながら、この容易ならざる時代を生きのびる手がかりをさぐっていきたいと思うのです。

世界市民については、あとでまた触れたいと思いますが、ロマン・ロランを読んでこられたみなさんは、すでに世界的な感覚を、持っておられるのではないのでしょうか。ロマン・ロランの大きさを、片山敏彦さんは、ゲーテのようだと言っておられました。また、一九六六年九月にヴェズレーで開かれたロマン・ロラン生誕百周年記念の国際討論集会で、日本代表として出席した蛭原徳夫さんは次のように述べておられます。

ロマン・ロランは、たんに芸術家であろうとするよりも、みずから真実な人間となることによって、人びとに人間としての本質を意識させようとした。その根本的な影響力は、彼の思想の普遍的性格に由来している。彼は西洋人であるとともに東洋人でもあったのであり、真の意味での「世界市民」(Weltbürger)であった。

と言われて、インドのヴェーダ思想や、ガンジー、タゴールに深い理解を示したロランが、日本の読者にも熱心に読まれている事情を話されました。蛭原さんはまた、『ジャン・クリストフ』の主人公は、「国籍や人種をこえた普遍的人間像、世界市民に成ったのだ」ということも書いています(蛭原徳夫『ロマン・ロラン』アポロン社)。

生きているということ

私をはじめ『ジャン・クリストフ』に出会ったのは、十五歳の時でした。そのころ、片山敏彦訳の第一巻(曙)が、みずず書房から出たばかりでした。信州の田舎の新制中学で、担任の国語の先生がもっていたんです。

ロマン・ロランの世界は、非常に広くて、深くて、大きいことを私たちはいま知っています。そのことを、その南小川中学校の傳田正直先生は、生徒たちに熱心に話してくれました。あの優雅なフランス装の本『ジャン・クリストフ』第一巻を手に、もう若くはない先生が目をかがやかせて、「生きているということは、素晴らしいことだ」といわれました。私はその本をせひ読んでみたくになりました。そして貸してもらいました。

この先生はそれまで旧制中学で教えていた人で、歌人でした。宮沢賢治の童話を授業の中でいくつも読んでくれたり、良寛の話をしてくれるような人でした。ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』を借りて読んだこともあり、私は長野市に生まれて、疎開先の小川村で傳田先生にめぐり逢うことができました。『ジャン・クリストフ』

は、まるで太陽のようでした。そして、ここにはなんでも書いてある、と思いました。

その二年後に私は上京して、尾埜さんなんかと同じように、荻窪の片山敏彦先生のお宅に寄せていただくようになりました。ロマン・ロランの友の会の会員で、青木やよひさんにいろいろお世話になっていた一人です。一九五四年七月末に、第十巻〈新しい日〉が出て『ジャン・クリストフ』が完結した時は、蛭原徳夫先生のお宅で開かれたお祝いの席に参加させていただきました。つまり私は、片山敏彦訳のクリストフとともに成長したということになります。みすず書房のロマン・ロラン全集が生み出されつつあった頃の東京の様子を、その一端ですがもう少しお話ししたいと思います。

一九五三年四月下旬に京都と大阪で、片山敏彦、宮本正清、蛭原徳夫の三先生による、ロマン・ロランについての講演会がありました。三先生はそのあと奈良にも行かれましたが、私は、その春から大阪市大で教えておられた蛭原徳夫さんと、奈良出身の山口三夫さんのおかげで、それらの催しのすべてに連れて行ってもらいました。

杉並区沓掛町の蛭原先生留守宅には奥さんが住んでおられました。片山家に近いので、いつのまにか部屋を借りて住みつく人も増えて、私たちは「沓掛御殿」と呼んでいました。そこで毎週のように集まっては賑やかにやっていたのが、村上光彦、清水茂、北沢方邦、美田稔といった、その後ロマン・ロラン全集の訳者に名を連ねる面々です。そのほかにも何人かいましたが、そこに来れば一度に用事の足りる青木やよひさんも時々現れていたと思います。青木さんは、その年の二月から東京で開かれていた研究会の世話人でもありました。みんなが集まるのは庭に面した中央の大きな部屋で〈ハルルス〉「百科事典なんかが並んでいて、そこには山口三夫さんが弟さんと住んでいました。

一九五四年は中小の出版社がバタバタとつぶれるような不況の年でしたが、『ユニテ』もこの年はガリ版刷りで出ています（VI・VII・VIII）。しかしロマン・ロランの青春の書と、若さの勢いで、あのころの「沓掛御殿」は、本当にいきいきとした祝祭的な気分が溢れていました。「生きているということ、素晴らしい」という感じで、私たちの

心にはいつもロマン・ロランが遍在していました。

そしてそのような空気は、そのころ世界と日本の各地に生まれてきた「ロマン・ロランの友の会」の活動などもあって、世界中に広がっていたのではないかと思います。当時の『ユニテ』に記録があります。まだみんな貧しかったけれど、戦後の希望に満ちた時代でした。ロマン・ロラン全集について言えば、八年がかりの〈第一次〉が完結に近づいていました。

みず書房という出版社は、たいへん幸運な出版をしたと思います。推進力の中心だった小尾俊人さんの剛毅な情熱と並はずれた努力は、その魅力的な企画と高雅な装丁造本からも、優れた協力者を獲得していきました。最初の大企画だったロマン・ロラン全集の訳者たちは、さきの三先生はじめみんな、魂の清らかな素晴らしい人たちでした。私はその後、小さな出版社の仕事や、雑誌の編集も多少経験しましたが、あのように献身的な人たちを見たことがありません。青木さんのような編集者についても同じです。まさに、「ロマン・ロランの友」だったんですね。

ですから私にとって、みず書房は常に高い峯のような存在でした。十五分きざみのテレビ時代になった今では、あのような個人全集や大河小説は、書店の棚では目にすることもできません。そして、版元に一部分少しあるだけで、もう当分は手に入りません。磨きぬかれた〈第三次〉『ロマン・ロラン全集』（以下「全集」）を持っている人は、まがいなく宝の山を持っているのだと思います。図書館にある本もだいたいにはしたいものです。

「沓掛御殿」の人たちとは、その後も時々会っていました。蛭原さんは十五年前、山口さんは七年前に亡くなりましたが、なにしろ、魅せられた魂の人たちですから、いつまでも若々しい青年のような心を持った人たちです。

さて宝の山の中身のことでですが、ロマン・ロランの読まれ方は多様で、それぞれ「私のロマン・ロラン」があるのだと思います。それほどに多面多様な創造的活動を行い、そのいずれもが一等星のきらめきを見せた作家でした。あ

あいう人はほかにはちょっといないんじゃないでしょうか。いまの時代の物差しに合わないスケールで、時々見えにくくなるのかもしれない。『ユニテ』二十八号の連載で、村上光彦さんは「わが国におけるロマン・ロラン受容は、いわば蝕の位相にさしかかっている」と言っておられます（蝕は日蝕月蝕の蝕です）。うまい言い方だと思いました。なるほど、いまは曇天つづきで、新しい世代にはなかなか光が届きません。そしてそのことこそが、いまの時代を物語っているのではないのでしょうか。

ロマン・ロランと戦争

『ジャン・クリストフ』が書きはじめられたのは一九〇三年でした。順次発表されて姿を現したクリストフが、人びとのうちに生きるようになって、今年で百年になります。クリストフの時代背景は、一八七〇年の普仏戦争から第一次世界大戦前夜までですが、主人公はいまなお人びとの心の中に、時代を越えて生きています。

ロランは『ジャン・クリストフ』の最終巻〈新しい日〉の中で、世界大戦が始まることを予見しています。それを書いた三カ月後にバルカン戦争が起こり、二年後の一九一四年には第一次世界大戦が始まりました。空前の大規模な戦争に直面したロランは、たまたま旅行していたスイスに、腰をおろして、大戦争の本質を見ずえることになりました。

この時ロランは、スイスの、レマン湖東北岸のヴヴェーに数週間前から滞在していて、まことに幸せな日々を送っていたらしいのです。戦争勃発は「不意打ち」だったと自伝に記し、当時のことを追想しています。

「戦争中の私の行動——戦時において戦乱を立ち超えての平和の行動——の反響は世界中にひろがったが、その行動のために、私の内生活の自然な歩みは四年間以上も停止していた。」（全集十七巻『内面の旅路』五三八頁）

五十歳の峠を越えながら、ロマン・ロランが心ならずも踏み込んだ、けわしいいばらの道でした。

私はこんどの機会に、ふだんはあまり手をのびさなかった、ロランの『戦時の日記』（全集二十七、三十巻）を全部見てみました。社会評論集（全集十八巻）の『戦いを超えて』と『先駆者たち』はこれまでもよく読んでいますが、『日記』といっしょに見ると、第一次世界大戦中のロマン・ロランその人と歴史的背景が立体的に立ち上がってきて、ふしぎな感動を覚えました。『戦時の日記』は単なる日記ではありません。ユニークな記録です。この日記を読み進めると、ロマン・ロランという人の偉大な行動の本質が明らかになってきます。大戦が始まるとどの国の世論も、憎しみの熱に浮かされて目が血走ってきました。ロランはその世論に抗して、ひとり敢然と立ち上がり、堂々と反戦のアピールをヨーロッパと世界に向けて発し続けたのです。

そして、関連する〈書簡集〉も何冊か読むことになり、この読書体験で私は、ロランをいっそう身近に感じるようになりました。ここで個別の内容について触れるのは不可能ですが、印象に残っていることを少し申し上げます。

二十世紀は戦争の方法が、科学技術の応用で劇的に変化しました。しかし、第一次世界大戦ではまだ知識人の発言に重みがあり、その代表的存在がロマン・ロランでした。まったくの個人による反戦行動でした。その孤独な闘いぶり、世間との関係は、戦時に書いて戦後に出版した小説『クレランボー』の主人公に幾分投影されています。そして、その「万人のために、万人に反対する」姿勢こそは、ロランその人の行動原理でした。これは実際には、なかなかできないことだと思えます。行動原理にはもう一つ、精神の独立がありました。大戦後、世界の知識人に呼びかけたあの美しい「精神の独立宣言」の基盤になったものです。この二つの原則は、一八九八年九月の日記に、すでにその原形が誌されています（全集十七巻『回想録』二六四頁）。付け焼刃ではなかったのです。

それにしても、ロランにとっては恐ろしい体験でした。辛酸をなめながら命がけで闘うロランの姿が『戦時の日記』

にはあります。スイスにいたので信念を貫くことができたとはいえ、実際に身の危険を覚えることが度々ありました。たとえばそのことを書きながら「憎悪の起源は……〔広場の市〕の時期に発している」と感じることもあります（全集二十八卷『戦時の日記 II』七四九頁）。また、パリからやってくる家族と容易に会えない、というようなこともありました。眠れない夜も、多かったです。良心の自由は、まさに辛酸をなめながら保たれていました。

病気がちのロランにとって、辛酸の味はなじみのものでもありました。一九一九年十月の日記には『ジャン・クリストフ』を書いている頃の、恐ろしい追想があります。そして、「わたしの医者はジャン・クリストフだった」というのです（全集三十一卷『インド』五三七頁）。一九一三年に初めて対話したツヴァイクも、「どのような精神的な労働力がこの外見のひ弱さの背後にかくれているか……」を後に感嘆をもって認めないわけにはいかなかった、と書いています（シュテファン・ツヴァイク『昨日の世界 I』三〇〇頁、みすず書房）。

ロランは一九一四年十二月の日記に、ローマ教皇の「回章」の内容を紹介しています。教皇はその中で、社会主義を批難して「富者に逆らう無産の徒は、正義と慈悲とに反して罪を犯している……」などと発言しているのです。ロランはこう書いています。「なんと人をくった慈愛！ なんとという貴族的な尊大さ！ これを書いた人間は決して辛酸を味わったことがないということがわかる」（全集二十七卷『戦時の日記 I』一五二頁）。私はこれを読んでハッと、眼を洗われる思いがしました。

「どの国の人々であれ 悩み そしてたたかっており やがて 勝つであろう 自由な魂たちに ささぐ」

『ジャン・クリストフ』巻頭のこの言葉は、ロラン自身の辛酸の味から生まれたものだったのです。

しかしクリストフは、戦時にスイスで暮らすロランを、物心両面で大いに助けたのでした。ことに一九一六年十一

月にノーベル文学賞を受けたあとは、世界中の熱心な読者からの手紙が、ロランを励ました。

おもにスイスの新聞に載った『戦いを超えて』の内容は、一九一五年秋にパリで出版されるまでは、世界に正しく伝わりませんでした。本になると、たちまち各国語に翻訳されて、大戦中の世界に大きな反響を巻き起こしました。

同時に、戦争の煽動者たちによる激しい攻撃的ともなり、根深い憎悪にさらされます。ところがロランの方は、憎しみを超えていて「私はどの民族も憎むことは出来ない」といいます。ここがロランの偉いところだと思います。

ロランの母の死は、『戦時の日記』の最も痛切な頁です。戦後のパリへ五年ぶりに直行して、母を看取りました。

ヘルマン・ヘッセとの交友は、清らかな美しい物語です（全集三十九巻）。国際赤十字俘虜事務局で奉仕活動をしていた頃から、ロランは度々ヘッセを訪ね、二三年にヘッセが贈った絵は、妹のマドレーヌ・ロランを魅惑しました。

ロマン・ロランは『マハトマ・ガンジー』（全集十四巻）で、ガンジーの非暴力による行動の意味を、第一次大戦後の西洋に伝えました。現代では、人間の普遍的な価値を示す世界の思想として、人類の希望を支えているはずで

社会評論集の全集十八巻は、とてもなつかしい本です。若いころ山口三夫さんたちと時々読みました。『闘争の十五年』の中の「過去への訣別」には、第一次世界大戦中のロランの思索と行動が総括的にまとめられています。同じ本の「パノラマ」がそれに続く年月を回顧したもので、この二篇を読めばロランの〈戦争と平和〉論がほぼ概観できます。

『革命によって平和を』は、ヒトラー政権が出現する前後の文章が多いのですが、迫ってくる戦争とファシズムの脅威に対して、ロランが鳴らした「集合太鼓」です。ロマン・ロランは、国際反戦会議のシンボルでした。

ロランは一九三二年六月に、日ごろ心の底を打ち明けているソフィアへの手紙でこう言います。

「行動は、創造と同様に、私が呼吸するときと同様に、一つの自然の要求です。そして私は人類の未来のために開いつづけますが、人類は結局、希望よりも憐憫の念を私にあたえます。それは自然の非論理性です。」（全集三五卷『したいソフィア』六五〇頁）

ロマン・ロランの精神的自伝『内面の旅路』の中の「周航」は、はじめ一九二四年に書かれましたが、第二次世界大戦が始まって一年たった一九四〇年九月に、加筆修正されています。

ヴェズレーの家のテラスから、ナチスの軍隊が進撃するのを見ながらも、七十四歳のロランはこう書いています。

「私の全生涯は外観においては敗戦の連続であった。しかし私の内面にいるコラとクリストフとが私に言う——結局のところでは、勝利はわれわれのものだ！——勝利は私のものである。（……）私が欲するのは、人類をみちびいている諸法則が勝つことなのだ。」（全集十七卷『内面の旅路』五六四頁）

ロランはさらに、「私は、戦争のさなかに平和な心をもち、こんな地球の動乱の中で、確かめられた精神をもって、彼らに別れをつける」と書きます（同、五六五頁）。そして「宇宙的・普遍的な夢のふところに還り」、「私の島にもどる」（同頁）ことにしたロランは、『ロベスピエール』、『ベートーヴェン研究』の連作、『ペギー』を仕上げます。一九四四年夏のパリ解放を見とどけて、年末に亡くなりました。ロマン・ロランは勝っていたのです。

大戦下のフランスでロランは、絶望にさいなまれ、深い悲しみを心の底に湛えていたと思います。しかしロマン・ロランという人は、なんとやさしい言葉を人びとにかけ続けたことでしょう。私はそのことに深く打たれます。

ロマン・ロランが亡くなった半年後にアメリカで原子爆弾が完成しました。最初の核実験が一九四五年七月十六日、

ニューメキシコ州のアラモゴードで行われ、その二十日後に原爆は、広島と長崎の、人間の頭上に落とされました。

消えた幻影

平和を取り戻した戦後の世界では、ロマン・ロランが盛んに読まれました。戦争から解放された明るい空気の方で、米ソ対立による東西冷戦の時代が始まっていました。ロランの読まれ方もさまざまだったと思います。それが四十年余りしてソ連があっけなく消滅してしまうと、おそらく世界中でロマン・ロランの読まれ方にかんがりの異変が起きたものと思われまます。その理由のほとんどは、つまりロランの「ソ連擁護」に対する批判ということのようです。そしてそれは、人びとの長年にわたる過剰な思い過ぎだったのかもしれない。

村上光彦氏は、最近の文章のなかで、ベルナール・デュシャトレ氏の『あるがままのロマン・ロラン』から、第二次世界大戦勃発前後のロランの未発表の日記を引用しています。

「わたしとしては、もう憤慨する力もない。わたしには人々が、諸国家が見える。いたるところ、同じである。昔からずっとそうであったように、同じである。彼らの政治は、奸策、野蠻、破廉恥のどれをとっても、なんの新味も見せてはいない。これまでの数世紀にわたってずっと行われてきたとおりの政治である。〔……〕正義と人間性という一新した基礎に立つ新世界がソ連で建設されてゆくものと期待してしまったのが、われわれの誤謬であった。われわれはレーニンの事業を信頼した。だが彼の後継者どもは、いまそれを踏みにじった」。

（つぎに、デュシャトレ氏の文章の要約が続いています。）

彼は、ソ連が〈国際革命〉の名のもとに汎スラヴの帝国主義の相貌を露骨に示したことも告発した。ソ連は他国

を征服しては、それを「革命」の美名で飾っていた。ロランはソ連の欺瞞を直視して胸を悪くするのだった。

ロランはそれより先、友人だったゴリキーの死が当局による毒殺だったらしいということに感づいていた。モスクワ裁判が続いて、スターリンがかつての僚友を肅清してゆく様子も遠くからみていた。あれやこれやで彼のソ連への信頼は前から揺らいでいたのだが、いまや最後の幻影まで崩れ去っていった。

そのころ、ロラン夫人のマリーと前夫とのあいだにできた息子のセルゲイがヴェズレーに来ていた。だが、彼はソ連に帰らなくてはならなかった。息子はまずパリに向かい、それっきり音信不通となった（二年後に戦死したことが、後年わかった）。マリーは不安に胸をさいなまれていた。そういう不安の虜となった妻のそばにいて、ロランはソ連との絶縁を公表するわけにかなかった。彼の発言しだいでは、ソ連に帰ったセルゲイやその家族にどういふ危害が及ぶか測りがたかったからだ。彼は（一九三九年九月末の日記に）こう書きつけた。

「もしわたしに妻がいなかったら（そしてわたしは当人にそう言った）——そしてとりわけ、愛する義理の息子がいなかったら（彼はモスクワで人質になっている）——またわたしがスイスに居住していたら（結婚しなかったらスイスに留まったはずなのだ）、わたしはきっと新しい『戦いを超えて』を書いたであろうに。それは最初のものよりずっと力強く、またずっと報復的なものとなつたろう。それが出ると、わたしめがけて、前のよりさらにいっそう憤怒に満ちた憎悪が旋風のように吹きつけてきたろう。——両側からである——わたしはすべてを語り、すべてを告発したのである。ソ連政府のおぞましい裏切りと、その恥ずべくも非人間的な冷笑的態度とを、——さらにもたまたま英国およびその衛星国たるフランスの金権政府の背信行為を。この両国は不実にも何年も前から、ファシズムともナチズムともいかがわしい駆け引きを演じてきた。（……）しかし、交戦国から発言するのは不可能である。そこでは思考も運動も封鎖されてしまっているから」。

（村上光彦「独ソ不可侵条約調印前後」——『大地』二十七号所収、大地の会　〇三年発行）

私はこれには驚きました。ヒトラーやムッソリーニらによる戦争が、ついに始まってしまった時の、ロランの絶望の深さ、その歎きの大きさが噴き出しているとはいえ、こんなに取り乱した感じのロランを日記に見るのは初めてです。戦争を防ぐ力として期待していたソ連政府の裏切りに対する、激しい怒りが鮮やかに書きつけられているので、あえて長く引用させていただきました。それにしても、『新しい、戦いを超えて』をぜひ読みたかったですね。

ロマン・ロランはやはり利用されたのだと思います。党派性や宗派性から常に自由であろうとしたロランは、後半生いつも（たとえそれが善意であるにせよ）利用しようとする人たちに取り囲まれていたようです。しかし一九四〇年九月、『内面の旅路』に、「私は《行動》の圏の外に出ている」と書き加えました（全集十七巻、五六三頁）。

晩年のロマン・ロランの日記は、いずれ二十一世紀の人びとの前に全貌を現すことでしょう。そこには二つの世界大戦の時代を生きたロランの受難と闘いの人生が、神秘的な、そして極めて人間的な姿で結晶しているものと思います。

デュシャトレ氏の『あるがままのロマン・ロラン』も、早く訳書が出るといいですね。

核の存在

一九八九年十一月九日、突然ベルリンの壁が崩れはじめました。すごいことが起きるもんですね。人間の自然な力の勢いというか、いったん風穴があくと、いわゆる「鉄のカーテン」が次々と取り払われて、すっかり風通しがよくなりました。ひと月も経たないうちにマルタ会談があり、冷戦の時代が終わりました。そして東西に分かれていたドイツは、一年後の一九九〇年十月に統一を果たしました。

私はそのころまでやっていたすすさわ書店を退職して、月刊誌の『軍縮問題資料』を手伝うことになりました。そ

こてまず、ドイツ統一を取材して帰ったばかりのテレビの人に寄稿してもらうことにしました。その人は早速、日独の戦後処理の違いなどもふくめて、歴史的シーンの見聞を書いてくださいました。

これはおもしろいなあと、私は思いました。ジャーナルな感覚で、世界のナマの問題を、ひと呼吸置いて考えていくことができる。それに単行本と違って、短い文章は比較的気軽に引き受けてもらえます。次の新年号からは、特集方式でいくことになりました。折から人間社会を吹き抜ける新しい風を、テーマ毎にとらえていこうというわけです。当面のいくつかの特集の企画がまとまりました。憲法、国連、中東、それに地球環境や教育の問題などと、それぞれのテーマを中心に、いろいろ工夫して特集を組み、順次原稿を依頼していくというものです。

それまでの出版社の仕事は、ルポルタージュや社会評論などの単行本が中心でしたが、こんどはじかに、正面から世界の戦争と平和の問題に取り組んでいくことになります。そこで友人たちにも声をかけ、ロマン・ロラン全集の訳者や関係者の皆さんにも「賛助出演」してもらうことにしました。表紙裏の〈平和を愛する〉という、すこし面倒なコラムでしたが、大体ずうっと交替で担当していただき、時にはエッセーなども書いてもらいました。

ベルリン統一の三カ月後には、湾岸戦争が始まり、米軍はテレビゲームのような戦況発表をしていました。雑誌は急速予定を切り替えて、湾岸派兵反対の特集を組みました。こうなるともう、おもしろいなんて言っていられませんが、まったく同じ問題をかかえながら今年のイラク戦争につながるものでした。この戦争は、冷戦が終わったばかりの時に起こされた戦争です。

この一九九一年は、それからゴルバチョフ大統領が来日したと思ったら、ソ連では夏にクーデター未遂があり、エリツィンが前面に出てきて、年末には突然、ソ連そのものが消えてしまいました。雑誌にとっても慌しい一年でした。九〇年代前半は、世界も日本も、まさに激動の時代でした。ソ連が解体して十五の共和国となり、新しく生まれたロシアとアメリカの間で戦略兵器削減条約（START I・II）が調印されました。「第三次世界大戦」はひとま

ず違のいたわけです。しかし、旧ユーゴやアフリカでは民族紛争が激しくなり、南北問題はより深刻になりました。日本でも自民党単独政権から連立の時代に入りました。細川、羽田内閣に続いて、自社さ政権の村山内閣というフシギな時期もありましたが、橋本内閣あたりからしだいに、元のモクアミになってしまいました。

この間私は、特集を作りながら今の世界のことをいろいろと学び、そして考えさせられました。六年いて辞めました。一九八〇年に雑誌を創刊した宇都宮徳馬さんは、平和と軍縮を主張する骨太の政治家でしたが、三年前に亡くなりました。「政治は陰謀の世界だ」と言い、核兵器を中心とした軍拡競争を本気で怒っておられました。

核兵器の存在は、私のささやかな市民運動の出発点でした。一九六五年の春、山口三夫、清水茂、と私の三人は、轆のような形の手作りのプラカードをかついでベ平連の二回目のデモに行きました。そのころ私たち三人はみんな、人の子の親になったばかりでした。歩きながら渡す私たちのチラシには、「いったん核戦争になれば、地球上に平和で安全な場所はどこにもなくなりません。……」などとあります。風が吹くとプラカードが大きすぎて重いんですね。ベトナムで米軍の北爆（北ベトナム爆撃）が始まって二カ月余り、今思うと初々しい市民デモでした。生まれたばかりの子供を核戦争にさらすわけにはいかない、というのがその時の私の切実な思いでした。

それからベトナム戦争が終わるまでの十年間、仲間はそれぞれ入り組みましたが、「ベトナム反戦のはがき」六七年、「英文・戦場の村」六八年、英文「Give Me Water」和文「水ヲ下サイ——広島と長崎の証言」七二年、などの、絵はがきや小冊子を作りました。なんとそのどれもが、みず書房の二人、青木さんと小尾さんの力をかりています。青木さんは市民の仲間として、小尾さんは陰ながら制作面で、いつも協力してくださいました。また、新聞の投書欄で知り合った牧師さんたちと、内外の新聞にベトナム反戦の投書などをする運動（ベトナム反戦市民の声）というのもやりました。どれも比較的地味な、世論喚起のための純粋な市民運動でした。戦争当事国のアメリカの市民に直接

呼びかける、というのがいつも基本にありました。そして、私のひそかな心のよりどころは常にロマン・ロランでした。

ですから、ロマン・ロラン生誕百年の年に集会を開いて、「ロマン・ロランと現代の会」という読書会を山口三夫さんなんかと始めたのも、行動としての運動とは別の、思想および精神の領域でのことでした。一九六八年にマリイ・ロマン・ロラン夫人が来日されたときには、歓迎会を開いて花束をさし上げました。たのしい会でした。

この読書会の例会は、たぶんこちらの例会と同じようなやりかたではないかと思えます。たまには「階級闘争の視点がない」なんていう人もいましたが、『ユニテ』のような記録が残っていないのは残念です。

ベトナムで核兵器は使われませんでした。戦争が終わってから、やはり使う計画があったという記事を二度ほど見ました。朝鮮戦争のときも、マッカーサーが原爆の使用を主張して最高司令官を解任されています。兵器は持つていると必ず使いたくなるらしいです。ですから、反核の運動は多様に重層的に行うべきで、いくらあっても足りないのだと思います。人間の中の神性が勝つか、悪魔性が勝つか、そのたたかい、または競争なのかもしれません。

新しい人たちがそれぞれに、自分で考えて、核兵器の存在に立ち向かっていってほしいと、私は思うのです。

かすむ平和

冷戦が終って、不戦勝のような格好になったアメリカが、いつのまにか自国中心の、だれも抑えのきかないような国になってきています。それに顔をしかめる国と、おとなしくついていく国があって、それぞれの国の人たちは、さまざまな立場におかれます。正しいか正しくないかより、損か得かが判断の基準に置かれる場合が多く、そのために世界の平和は、かすむ一方で、光が見えません。それはアメリカ人にとっても、本当はいい時代ではないはずで

二十一世紀に入ったところで就任したアメリカ大統領は、選挙の前後にいろいろと問題のあったブッシュ二世でした。最初からケチのついたこの大統領は、面目も自信もなく居直っているうちに、9・11のテロに見舞われ、報復を叫んで一極支配の軍事力を大いに振り回しました。アフガニスタン、イラクと暴れまわり、これからは先制攻撃もやるし、核兵器も使うぞと、世界を脅しています。まるで世紀末のインチキ選挙のツケを、世界中が払わされているようなくあいで、世界の人びとはまことに憂鬱です。国連も平気で無視するし、国際世論なんて気にもしません。肝心のアメリカ人は、大方が自己中心的個人主義で、世界に無関心だといえます。日本ではいま、エドワード・サイードや、ノーム・チョムスキーの本がよく読まれているようですが、本当にアメリカの民主主義は機能しているのでしょうか。

アメリカの大統領選挙制度については、ロマン・ロランも第一次世界大戦中の日記に「アメリカ人ほどいい加減なものはない」と書いています。新聞に出た当選者ではなく、結果が分らずにいたが、最後にはウィルソンが当選していたというのです（全集二十九卷『戦時の日記 Ⅲ』九八三頁）。

あの野蛮な選挙制度は、一七八七年から引き継がれている成文憲法に縛られていて、改正が困難だというのですが、まずはその憲法を改正すべきだと、国連にも勧告してもらいたいです。現代世界の重要課題かもしれません。核兵器にしても、最大の大量破壊兵器を持っているのはアメリカです。少数の国だけが核保有の特権を独占して、同盟国を傘下に入れながら、小型核兵器を作って実戦に使えるようにしても、解決にはなりません。小型核兵器や生物化学兵器によるテロを最も警戒しなくてはならないのは、アメリカ人自身ではないでしょうか。そして核拡散の流れはもう止めようがないほど激しくなっています。冷戦体制から解放されたロシアは、雪解けどころか、経済危機の大洪水に翻弄されました。核兵器を処分しようにも、その費用さえありません。今でも諸外国の援助に頼っています。失業した核技術者が海外で雇われるケースもあり、核管理の杜撰さは相当なものだといえます。インドとパキスタン

は、一九九八年に核実験をして、核保有国になりました。核拡散を止めるには、核廃絶しかないので。

核兵器を持つということは、じつに厄介なものなのです。――まず、見えない敵が一度に増える。一気に叩かれて潰されないためには、新たな警戒態勢が必要となる。ミサイル防衛(MD)というような未完成の技術に、莫大な予算を組まなくてはならない(核保有国でもないのに日本はいま、このバカげた計画に参加しようとしています……)。持てる者特有の疑心暗鬼も生じる。絶えざる研究・実験や、管理も大変なら、廃棄の費用も積み立てていかななくてはならない。――いいことは少しもないのです。

いわゆる「北朝鮮の核保有」という事態は、日本人にとっては迷惑千万な話です。本来日本は、平和憲法によって自らの「核保有」からも免れているはずで、ところが去年から、「核保有」は憲法違反ではないといっている人がいます。今の自民党幹事長です。アメリカのネオコンに「日本核保有論」を言いたてる人物がいます。焚きつけた者がいるはずで、そういう人たちは、核戦争になったとき、自分たちだけは助かると思っっているのでしょうか。

なにしろこの国ではいま、世間知らずの、辛酸の味などまるで知らない三世、二世ばかりの政治家たちが、相当荒っぽいケンカ腰の外交をくり広げています。国交正常化交渉といいながら、約束は守らないで、ひたすら脅威を煽る。権力の管理下にあるかのように、テレビはこの一年余り、いったいどのような北朝鮮報道をくり返してきたのでしょうか。日本人は冷静さを失ってすっかり変わってしまいました。その勢いに、新聞はほとんどお手上げ状態で同調しています。「北朝鮮の核保有」とは、そのような過程で起きてきた意外の展開だったのではないのでしょうか。

しかし政府の作戦は的中したのです。長年どうにもならなかった有事法制は、なんと九割の議員が賛成して、あつというまに成立してしまいました。イラク派兵法も通り、総選挙後のこれからは、改憲への最短距離をさがして突っ走ろうとするでしょう。北朝鮮の事態は、タカ派の日本政府にまんまと悪用されたのです。今後周辺国は、韓国の意向を益々尊重するでしょう。当然のことです。日本人は、どこで目が覚めるのでしょうか。私は心配しています。

日本人を意識しすぎたので、すこし人間にもどることにします。

世界市民の輪

人間っていい言葉ですね。私は日本人やっけていて疲れると、まず人間なんだ、と思うことにしています。

年をとったクリストフがグラチアに会いにローマに行つて、そこで国際結婚などによる人間味の豊かな人たちに会い、古代ローマの奴隷だった喜劇作家、テレンチウスの言葉を思い出します。「私は人間である……」(全集四巻『ジャン・クリストフ』二二五頁)。

その言葉は『戦時の日記』の中にも出てきます。「私は人類に属する。私は人間である。(……) 私は人間たちの祖国を探し求めている」(全集二十九巻、一〇一三頁)。スイスにいるロランの悲痛な叫びです。

大戦後にロランは、「戦時の日記」についてツヴァイクに書きます。「この覚え書は個人的価値というよりも集団的証言という関心をひくものです。(……) 諸国政府やあらゆる国の世論から庄迫され迫害された忠実な『世界市民』たちの証言です」(全集三十八巻『往復書簡』一八七頁、一九二〇年一月四日)。ここでの人間は、世界市民に成っています。

現代の人間社会は、自滅の手段を際限もなく作り続け、大殺戮と地球環境の大破壊をくり返しています。人間ほど恐ろしいものはないけれど、ロランのような人のことを思うと、希望や勇気が湧いてきます。ロランは言いました。

「人類はなんとただ一つであることか、そしてなんと相違の少ないことか！」(全集十七巻『内面の旅路』五五七頁)。

ロランはいつも、人間の「ユニテ」（調和的一致）のことを考えていたのだと思います。自立した一人ひとりの人間が、「ユニテ」をめざすという感覚でつながれば、世界市民の大きな輪ができるはずです。たとえば、「戦争だけはダメ！」と思った人たちが、「戦争やめろ！」「NOW WAR!」と叫んで街にくり出したのを、私たちは見なかったでしょうか。皆さんの中には、あの「イラク攻撃反対」のデモを、京都で歩いた人が何人かおられるのではないのでしょうか。それにあの、新聞の反戦大広告（朝日、〇三年一月二十九日付！）を、「その調子をやめよ！」とばかり、華々しく打ち上げた人たちと、協力した人たち……。そのとき、私たちはきっと、小さな世界市民だったのです。去年十一月には、あの狭いフィレンツェの道に百万人！今年二月十五日は、六十カ国で一千万人の反戦デモが世界を一周しました。

それでもイラク戦争は三月二十日に始まり、今のあのザマです。この戦争の大義とされた大量破壊兵器は見つかりませんでした。戦後はなりふりかまわず強者にへつらうのが今の世界の流行のようです。果してアメリカは勝利者なのでしょうか。地上最強の武力で一方的に攻め込んだあのような侵略戦争が、人間の歴史の上で正当な戦争として認められるとは到底思えません。

私は開戦まで、こんなに世界中の市民が反対しているのだから、いくらなんでもイラク攻撃はできるはずがないと、祈るような気持ちで毎月反戦デモに出かけました。テレビもよく見ました。NHKニュースは、アメリカのテレビと同じなので、「フランス？」なんかをさがして見えていました。その後には現実のものとなったあの戦争の結果を、反戦の意思表示をした心ある世界市民たちは、まだだれも認めていないのではないのでしょうか。

この戦争は、まだ終わっていません。単独行動主義どころか、単なる暴力主義です。その子分になって、いまからノコノコ出て行くというのでは、世界の物笑いのタネになります。ツケもどんと来るでしょう。平和立国の日本が、正義とはほど遠い戦争に一步近づいているのです。

作家の池澤夏樹さんは、「世界の人々（の言葉）と国際法と国連が、アメリカの武力に負けた」の다고言っています。（池澤夏樹『世界のために涙せよ』光文社、二八五頁）

私は、インターネットを操る若い人たちの中に、一つの夢もっています。「世界市民から世界市民へ」という、反戦反核の大きな輪をつくれないうか。日本語・英語・フランス語・アラビア語……などの恒常的なHPができて、世界市民の大きな輪がしだいに地球全体を包むとき、あるいは突然、「ユニテ」が見えてこないでしょうか。

ロマン・ロランなら、現代の世界市民のための「新しい、精神の独立宣言」を書くところでしょう。人類生存のための普遍的原理である、日本国憲法第九条の精神なども取り入れて、人類の未来に光を灯してくれるでしょう。

はじめにお話しした蛭原徳夫さんは、ヴェズレーのロラン生誕百年記念集会での挨拶を、こう締めくくりました。

今日、この地球上で、物質的な利害関係による憎しみが対立し、無意味で悲しむべき殺戮が残酷におこなわれている。われわれはロマン・ロランの精神を受け継ぐ者たちとして、固く手を握り合いながら、真の平和の実現のために働くことを誓い合おうではないか。

当時はベトナム戦争の真最中でした。いま、世界の現実はいささかきびしさを増しています。私たちはお互いに小さな世界市民として、「ユニテ」による永遠の平和をめざして、世界への関心を一層深めていきましょう。そのようなとき、ロマン・ロランはいつも、私たちを温かく見守ってくれているのだと思います。

『ミケランジェロの生涯』（全集十四巻『伝記』二二五頁）の最後に、作者ロランのこういう言葉があります。

偉大な魂は高い山頂のようなものである。風がそれを打ち、雲がそれを隠す。しかしそこでは他のいかなる場所

よりも、じゅうぶんにして強く呼吸することができると。その空気は清らかで心の汚れを洗い落とす。(……)
そして日々の闘いのために心を強められて、人生の平野にふたたび降りてくることができるであろう。

ロマン・ロランも、とくに見事なそういう山頂だと思えます。作品だけではなく、その山せんたいの自然や音楽にいたるまで、ロマン・ロランから受け取ったものがどんなに大きいかを思い、ロランに連なる人たちに、あらためて感謝しながら、つたない話を終わりたいと思います。

(元すずさわ書店社長)

二〇〇三年十一月二十二日、関西日仏学館でのロマン・ロランセミナー講演会から。

ロマン・ロランの作品による音楽とレコード

尾 埜 善 司

一 めぐり合い

ある人とか芸術とか思想について語るときは、自分と無関係に述べるべきではないと思います。きょう、財団法人ロマン・ロラン研究所の主催でロマン・ロランの作品による音楽とレコードについて語り、聴いて頂くに先立って、この点を少し述べてさせて頂きます。

私は高校二年の夏、岩波文庫で『ジャン・クリストフ』を読み、「クリストフよ、一生友達でいてくれ。」とノートに書きました。そのころ、みすず書房が出し始めた『ロマン・ロラン全集』の配本を心待ちにし、片山敏彦著『ロマン・ロラン』に感動しました。その幸せな体験を共にした近藤 脩君が鎌倉からここに来てくれています。一九五〇年この東隣の京大法学部に入りますと、すぐ宮本正清先生にお目にかかりたくて、この関西日仏学館をたずね、入学し、先生からフランス語初級を教わりました。すでにロマン・ロランの友の会京都支部が、宮本先生を中心にスタートし、この教室やサロンで毎月若者らの読書会が開かれ、六月の会に初めて出ますと、教室には早々と、白髪のお品なおばさんと若い女性が席に着かれ、寄り添うように一冊の本を読まれました。出版されたばかりの高田博厚『フランスから』（みすず書房）で、私もすぐ買って読み（師）ロマン・ロラン』に感動しました。この日は、

ここにも来て頂いている波多野茂弥さんが『理性の勝利』について話されました。さきのお二人は京大物理学教授の未亡人、玉城芳江さんと一人娘でピアノニストの嘉子さんと判り、嘉子さんと波多野さんとは、いつからか存じませんが、いいなすけでした。私が大学を卒業した夕べは玉城邸で、お三人がお祝いで下さり、うれしく酔った私は二階に上げられ、おひる過ぎて降りてこず、ご心配をかけました。七年後、私が結婚した時、玉城のおばあちゃんは（尾上の大松のごと生い茂り 世の平和の力たれ 君）と壮大にお歌を寄せて下さったのでした。一年生の秋、宮本先生は交換教授としてバリのロマン・ロラン研究所へと游学されることになり、この学館サロンでの友の会の送別会で、玉城嘉子さんがベートーヴェンのピアノソナタ一〇六番のアダージョを演奏され、私らは神戸港のラ・マルセイエーズ号の甲板まで先生をお見送りしました。

一九七〇年、宮本先生は印税の貯金すべてを抛出し、銀閣寺に土地建物を購入し、財団法人ロマン・ロラン研究所を設立され、弁護士の方も先生のご指名で監事の職に連なり、先生亡きあとは奇しくも私が理事長の職を引継ぎ、大學生時代からご縁を頂いたロマン・ロランを敬愛する方々のご支援のもとに活動し、こんにちに及んだ次第です。

二 ロマン・ロラン唯一の肉声

さて、ロマン・ロラン（一八六六一一九四四）の作品による音楽を収めたレコード・CDですが、今回はこれらを網羅的に並べるのではなく、ご縁があって私の手もとにあるオリジナル・レコードから抜粋し、その全体を研究所スタッフの清原章夫さんにCD-ROMに移してもらったのを、私の話の合間に順次聴いて頂きます。

先ず、ロマン・ロランの現在聴ける唯一の肉声をお聴き下さい。一九三六年二月スペイン人民戦線内閣が誕生しましたが、七月には叛乱軍が一斉に蜂起し、八月にはフランコの率いる叛乱軍がモロッコから本土に上陸します。八月

二十五日アムステルダムのパッファロー・スタディアムで反戦平和集会とデモが行われ、スイスから一時フランスへ帰国していたロマン・ロランが、この集会のため「スペイン共和国へのメッセージ」を録音しました。奇跡的にこの録音テープは保存され、一九五五年頃、フランス・フィリップスが発売したレコード「二〇世紀の作家」十二巻の「ロマン・ロラン」に、「ガンジー」「ジャン・クリストフ」「劇は終わった」の抜粋の朗読と共に、一部分収録されているのです。これは日本でも一九六七年に発売されたことがあります。お聴き下さい。(三分十秒)。

① ロマン・ロラン——付・著者の声

仏フィリップス(モノラル十インチ) A七六七二二R

ロマン・ロランの肖像

日ビクター(モノラル十二インチ) SFX七六〇〇

「スペインを援けよ。スペインは、われわれのため、われわれフランスのため、われわれデモクラシーのために戦っている。この両者が危険に瀕しているからである。敵はわれわれを包囲しようとしている。彼らをピレネー山脈までこさせてしまおうのか？」

スペイン国民は、侵略者に対する南仏の前線である。いったいだれが、われわれを防衛してくれる者たちを防衛することを禁じようとするのか？ スペインの戦いはわれわれの戦いである。われわれを防衛しよう。スペイン国民を防衛しよう！ 国民の多数によって選ばれ、他のすべての政府より承認され、国際連盟の一員であるスペインの合法的政府を封じ込めるがごとき行為は、厚顔かつ非道な行為である。なぜなら、自国民を裏切った將軍たちは、その自国民のうえに、外人部隊の傭兵どもを放ったのだから、叛徒を支持したり、スペインの合法的政府に対し、自国防衛のためのあらゆる手段を拒否している政府は、スペイン国民のうえに振りあげさせている斧が、やがて自

分たちの頭上に落ちてくることを理解しないのか？ もし、明日にでも、自国の植民地が叛乱を起こし、ヨーロッパが自国を孤立させ、叛徒に武器を与えてもしたら、そのときロンドンは何と言うであろうか？ いかなる反テモクラシー的、反フランス的詭弁によって、フランスにおいては、スペイン国民の合法的政府をも、叛乱を起こしたならず者をも、おなじ中立的な物差で測るようになってしまったのか？ 彼らならず者は、おこがましくも、自国民に対してばかりでなく、われわれフランス国民に対しても凶悪な脅迫をあえて口にし、全西欧のデモクラシーを粉砕しようとのぞんでいるのだ。」〔山崎庸一郎訳 全集未収載。〕

七十歳のロマン・ロランの若々しい声でした。このフランス版のレコードのジャケットにアンリ・プチがロランについて詳しく解説しています。この人は高校生時代から生涯ロランに師事していました。プチはロランの、このメッセージの声について、次のように書いています。「この声は、作品をとく鍵のひとつであり、交響曲の楽章を読んでいるようで、明確な発声、トーンの透明な上品さ、ドラマチックな知性に、すっかり感動します。」

三 フランス革命劇『七月十四日』

これはフランス革命劇八連作のひとつ（二九〇一）です。ロマン・ロランは一九三六年九月、日本の片山敏彦あての手紙に、こう書いています。

「私は八月にフランスを旅行しました。パリでは私の『七月十四日』の上演に幾日か立ち合いました。俳優と観客とが熱烈な信念に燃え上って、壮大な光景を呈しました。フランスの新しい作曲家七人が、各場面の音楽を担当し

合つて尊い協力を行いました（音楽においては信じられないことなのです）。コメディ・フランセーズ座の大俳優たちが、労働組合の労働者たちと合同して熱狂し、労働者たちは私の戯曲の群衆となつて異常な動きと調子とを示しました。ピカソが幕の絵を描いたのでした。つまり全観客（各階級の人々）が民衆の祭典の歌に声を合わせたのであり、その民衆の祭典は天才的な若いコルシカ人トニー・グレゴリーがみごとに演出したのです。三十五年間も黙殺されていたあげくのこと、私の『七月十四日』に就いてはすばらしい償いでした。私はそんなことは期待していませんでした。二十日にわたつて上演された間に（それ以上は劇場が空いていなくて今年には上演できませんでした。初めは七月十四日のお祭りを期に一週間ぐらい上演するつもりであったからです）、毎晩二千人の人の入場を断つたのでした。そして街の子供たち（バスチーユ広場とレピュブリク広場との間の街）は、最後の幕の民衆の祭典の歌を歌つたり口笛で吹いたりしていました。」

ロマン・ロランは片山敏彦にこのように書いていますが、この手紙の最後の数行も、是非読ませて頂きたいと思ひます。

「音楽があなたにとつても、私にとつてすべてであるのと、同じでありますように。すなわち青春の泉であり、肉体と魂とが身を浸して、そこから行動を得て出てくる清らかな泉でありますように。

心をこめてあなたのお手をにぎりしめます。あまりにも散らばりすぎ、沈黙しすぎている日本の友たちに、どうかくれぐれもよろしくお伝えください。」（蜷原徳夫訳）

まるで、いまの日本人が呼びかけられているみたいですね。

さて、若い作曲家七人組が共同して作曲した『七月十四日』の音楽のレコードが、一九七六年に録音、制作されました。

② ロマン・ロランの『七月十四日』

仏シャン・ドウ・モンドLDX七八五六（ステレオ）

ドンティエヌ指揮〈平和擁護の音楽〉

〈第一幕〉

序曲（イベール）

バレ・ロワイヤル（オーリック）

導入と葬送行進曲（ミヨー）

〈第二幕〉

前奏曲（ルーセル）

自由（ケ克蘭）

バステューユへの行進（オネガー）

〈第三幕〉

自由の祭典（ラザリユ）

合唱　パリ人民アンサンブル

これらの七曲が上演に際し演奏された場面と方法はよく判りませんが、どれも四分から六分の短い曲です。お聴き

下さい。第三幕の「自由の祭典」は、原作の「最後の場面——民衆の祭典 自由の勝利」に歌われるのですが、ロランは歌詞は書いていません。レコードで歌われるのは、——

自由、われらの最高の愛

この日の凱歌

バステューユ開放、おお喜び

人民の勝利を歌おう

……

ロランがこの場に加えた註釈による構想は、とてつもなく壮大で未来的です。とても実現はしませんでした。——観衆自身が終わりの歌と踊りに加わる。一刻も音楽は沈黙してはならない。歓喜と行動、自由のテーマ。私はオーケストラやコーラスの新しい性格を想像する。「第九」の行進曲の様式。舞台と観客席のすべての階で合唱。小合唱団と小オーケストラが観客をとりまき、共に歌う気になるように仕向ける。……

四 オペラ『コラ・ブルニオン』

ロマン・ロランは『ジャン・クリストフ』を書き終わると、一九一三年春から一年のあいだに、ほんとに古いフランスの笑いの精神を開花させた小説『コラ・ブルニオン』を執筆しました。これは窮屈なクリストフのヨロイカブトを脱いだから、という以上に、三十年ぶりにフランスに帰国して古いフランスの風土を満喫したこと、更には当時の

ソフィアへの手紙に書いています。「新しい青春時代にいるのを感じます。じつを言うとその春が近頃、情熱的なヴァンチュールに引き入れられました。日毎に歓喜と光へと登ってゆくを感じます。」それは二十三歳の女優Tで、ジュネーブで一年ほど共に過ごしたようです。

さて、「道化師」で有名なカバレフスキー（一九〇二—一九八九）は三十三歳で、当時ソヴィエトで新訳の出た『コラ・ブルニョン』を読み、この一作だけでもロマン・ロランは不滅だと傾倒し、折から訪ソしたロランと会い、一九三八年この小説のオペラを作曲します。ロランは、特にフランス民謡の本質やメロディーがすばらしい、作品の精神をよく伝えていると、手紙で激賞しました。しかしカバレフスキーは三十年後、これを全面的に改訂した第二版を出します。

全曲レコードは、一九七三年にソヴィエトからはじめて出され、七六年に同じ録音のアメリカ盤、九二年にイギリスCD盤が出ました。

ところで、京大に入った年、同志社大学で世界各国の訳書を集めて「ロマン・ロラン展」をやっているというポスターを見て、かけつけました。入口に立っていて初対面の挨拶を交わしたキャップの学生が、後年児童文学の大家となる今江祥智さんと、数カ月後、大阪阿倍野筋の古本屋「藤井天海堂」でバッタリ会い、ロマン・ロラン、ロマン・ロランと、電車道を何時間も行き来しました。このことがなければ、いま五十数年来の友人となって今日ここに見えることもなかったでしょう。ロマン・ロランの愛と力です。

そのころ今江さんは同志社で、新村 猛先生を中心にロマン・ロラン研究会を開いていたのですが、先生が彼の家に泊って『闘争の十五年』の訳文を推敲されるのを、とやかく言いつつ同席させてもらったこともあります。彼の父親代りのような先生も数年前になくなりましたが、昨年長女の夏子さんからお便りを頂き、父はかなりレコードを残しているので、今江さんと見に来るようになると言われるのです。早速二人で名古屋のお宅に伺って書斎のレコード棚

を拝見し、私は『コラ・ブルニヨン』の珍しいメロディア盤をご遺品に頂戴しました。これからお聴き頂くのがそのレコードです。ロランが讀えた民謡の合唱もと考えたのですが、時間の制約から序曲だけお聞き頂きます（全曲約二時間）。

③ オペラ『コラ・ブルニヨン』

露メロディア三三C M〇四二四五―五〇（ステレオ）

チェムチューチン指揮 国立音楽劇場管弦楽団

米コロンビアM三 三三五八八（ステレオ）

〔CD〕英オリンピアOCD二九一A+B（ステレオ）

④ 組曲『コラ・ブルニヨン』

英バラフォーンPMC一〇〇七

シュヒター指揮フィルハーモニア管弦楽団

米コロンビアML五一五二

ゴルシュマン指揮セントルイス交響楽団

次にポーランドの作曲家ベイルド（一九二八一―一九八二）は、一九五一年『組曲コラ・ブルニヨン』（全六曲）を作曲しました。彼は現代音楽も得意としましたが、他方この組曲のように、バロック、ルネッサンスの伝統に忠実で、精神性と情緒性を重んじ、あふれ出る美しさが、この作品を体現しています。次の機会に是非お聴き下さい。

⑤ ベイルド『組曲コラ・ブルニヨン』

独エレクトローラLC〇二三三(ステレオ)

マクシミウク指揮 ポーランド室内管弦楽団

五 グルック『精霊たちの踊り』

前半を終るに当たり、グルックのオペラ『オルフォイスとエウリディーチェ』の一部をふくむ組曲(モットル編)から、『精霊たちの踊り』を、しみじみお聴き下さい。戦後みせず書房から『ロマン・ロラン全集』が順次刊行されましたとき、第六巻『アントワネット』があまりにも美しいので、別に特製本が作られ、訳者片山敏彦は一九五三年春、次のように「あとがき」に記しました。「この姉弟の物語は世界文学の中での不滅のエレジーである。フランスで早くこの巻だけが出版されていたのは、グルックの『オルフォイス』の、特に『精霊たちの踊り』のフルートを聴きたくなるのがたびたびあるのに似た動因が、『アントワネット』自身の中にあるからだろう。」

片山さんがこう書いた、まさにその頃、東京荻窪の片山さん宅に若い者が集ったとき、片山さんはSPでこの曲をかけて下さったのでした。美しくはるかな思い出です。

さて、お聴き頂くのは、ケンペ指揮ウィーンフィルハーモニーのレコードです。ルドルフ・ケンペ(一九一〇—一九七六)は私が長らく傾倒し、先年世界初の伝記まで執筆、出版してしまいましたが、一九五一年ケンペが音楽総監督を務め制作された映画『ベートーヴェンの生涯』では、エロイカの演奏をバックに、ロランの『ベートーヴェン研究』のエロイカの部が朗読されました。お二人は様々に共通なのです。ではお聴き頂いて、休憩に入ります。

⑥ グルック『精霊たちの踊り』

独エレクトローラ ASD 四七八 (ステレオ)

ケンベ指揮 ウィーンフィルハーモニー管弦楽団

〔CD〕英テスタメント SBT 一 一二七

六 フランス革命劇『獅子座の流星群』

『獅子座の流星群』(一九二八)は『フランス革命劇』の終曲で、ロランは特にこの作品を愛しました。革命前の公爵は亡命して五十八歳、革命議会議員のルニョーも追放されて六十歳。それぞれスイス、ジュラ山中の町ソリュールに来て共に生活しています。一七九七年秋。仇敵であった二人の間には宇宙の運命を愛する「和解」の心が深まります。私は「和解」と言えばこの作品を思い出します。公爵はルニョーの十五歳の息子を愛します。第二幕。彼は病弱で一日歩き疲れ横になり公爵は彼を抱く、その時、若い農婦たちが背景で山を下りながら、ソリュールの民謡の子守歌「クリスマススの歌」を合唱し、公爵も口ずさむ。静かで美しい場面です。

戦前からの岩波文庫の『獅子座の流星群』の巻末には、この歌のロラン自筆の楽譜と片山敏彦の邦訳とが添えられていたのに、第二次、第三次のみずず版全集には、なぜか欠落し、今は読めないのです。そこでこれは「ロランの作品による音楽」ではなく「作品のなかの音楽」ですが、私が歌って聴いて頂くことにしました。楽譜はプログラムにあります。(本文別添)

一方、さきにふれました波多野茂弥さんが、今日の催しを聞いて、ポール・デュバン作曲ピアノ独奏曲『ジャン・クリストフ組曲』の全楽譜という珍しいものを私に提供して下さいました。これはすばらしい。特に「ゴットフリー

トおじさん」の曲（一九〇六）はすばらしい。すると、この独奏と私の伴奏を引受けてくれるピアニストが必要ですが、すぐに最高の候補者が頭に浮かびました。ここにお越し頂いた沖本ひとみさんです。プログラムに書きましたように、一九六〇年朝比奈隆指揮の大フィルと皇帝協奏曲を協演してデビューされた卓抜のピアニストで、今は後進の指導に当たっておられます。しかもこの人は私の高津中学の恩師のお嬢さんで、古い友だちなのです。私のために「クリスマススの歌」のピアノ伴奏曲を編曲し、練習用テープまで作り、友情出演してくれることになりました。人生、めぐり合いですね。

さて私の企画によれば、次に私が独唱することになりますが、失策でした。一時間以上トクして少しの休憩後すぐその人間が歌うなんて、無謀だったと休憩前に気付き、お茶のペットボトルを持って秘かに裏庭へ廻り必死にガラガラやっている、ひとりこの様を見てニコニコしている五十がらみの男がいる。何と私の大学時代の下宿の孫で、ニコニコしていた五歳の裕ちゃんではないか。人生、めぐり合いです。

⑦ 『クリスマススの歌』

『獅子座の流星群』第二幕

スイス・ソリユールの民謡

独唱 尾 埜 善 司

伴奏 沖 本 ひとみ

ロマン・ロランは一九二八年夏スイス山中からソフィアに宛て、いま『獅子座の流星群』の出版にかかっていると告げ、続いて次のように書いています。（宮本・山上訳）

「私はいちばん美しい国民祭典に参加しました。幾百の火が峰々にともされ、町々や村々の鐘が、家畜の群れの鈴の音にまじって、闇のなかに高まり、正しい澄み切った、美しい声で古い小曲（リトル・ソング）が四部合唱で歌われました。そして、ひなびた歌も山々の上から、火の番人たちの方から聞こえてきました。——そのまわり全体に、闇のなかに、歌とともに、小さな日本の提灯の行列が、けわしい山坂の道をうねりくねって行くのでした。私は富士山へゆく日本の巡礼たちのなかにいる心地がしました。」

『獅子座の流星群』の山中で、これほどまでに、未だ見ぬ日本、いまは失われた日本のなかにいるロマン・ロラン。感動しますね。

七 『ジャン・クリストフ』

一九〇四年頃にロマン・ロランにめぐり合った若く貧しい作曲家ポール・デュバンは、一九〇六年から八年までの間に、当時刊行されつつあった『ジャン・クリストフ』によって、四つのピアノ曲を作曲し、組曲『ジャン・クリストフ』として出版しました。さきに申しましたように、波多野さんがご所蔵のこの貴重な楽譜をこんど提供して下さいです。最近のロランの研究書には、デュバンの名が、しばしば現れ、深い交友が偲ばれます。

⑧ ポール・デュバン『組曲ジャン・クリストフ』

1 ゴットフリートおじさん

(ゴットフリートおじさんと彼の若いジャン・クリストフとの対話)

2 瞑想

3 息子ジャン・クリストフによるルイーザへの子守歌

4 キリスト教徒の旅の歌

(バルウ・ゲルハルトの詩による) バリトンとコントラルト

沖本さんと意見が一致したのですが、今日は取りわけすばらしい「ゴットフリートおじさん」を聴いて頂くことにしました。彼はクリストフの母ルイーザの弟で、小柄で貧弱で静かな旅の行商人です。クリストフの少年の頃に現れる彼の姿と言葉の魅力を、読者は生涯忘れることができないでしょう。彼はクリストフに音楽のたましいを伝えたのです。

お配りしたプログラムに、この曲の楽譜の冒頭をコピーしました。その左上に『ジャン・クリストフ』の一節の原文が掲げられています。下にその、私による訳文を載せました。「本文別添。亡き山口三夫さんの若者のための『ロマン・ロランの生涯』（理論社）にはロラン自筆のこの部分の楽譜と文章が載っています。」この曲は、この一文の情景に続き、ライン河畔を散歩する二人の対話を音楽にしたものです。その対話の精髓をここで読みます。たくさん名訳がありますが、今日は宮本正清訳を読みたいと思います。

宮本さんは早稲田大学の卒業にロマン・ロランを選び、子供たちのために『ジャン・クリストフ』の、主に幼少年時代の部分を訳し、卒業してこの関西日仏学館（当時、九条山）に赴任してきた二十五歳、大正十五年にこの本が出版されました。いまは実に珍しいその本が、この美しいブルーの三〇〇ページの小型本です。「ロマン・ローラン物語『ジャン・クリストフ』文学士宮本正清述（文教書院）」と記されている。なぜこの本が私の手もとにあるのでしょうか。高津中学の沖本先生の教え子、私の同級生も何人かこの席に見えますが、肥田皓三君は江戸文学の大家で、古

書の蒐集でも名高い人物です。いつか、この人から小包が届きました。「君の傾倒しているロマン・ロランの本。ようやく書庫から出て来たので贈ります。」とあり、この本が包まれていたのです。古い友情を深くさせるロランの愛と力に感動しました。読みます。〔中間省略し、ドイツ語を付加。現代表記に。〕

クリストフは、もう息もつかなかった。身動きさえもせず、感激のために身に寒さを感じた。唄が終わるとクリストフはゴットフリートにすり寄って叫んだ。

「伯父さん！」

「坊や……」

「ありゃ何なの、伯父さん？ 教えて！ 何を歌ったの？」

「知らないよ。歌だよ」

「伯父さんの歌かい？」

「ばかな！ わしの歌かい！ 古い歌だよ。」

「誰が拵えたの？」

「わからないよ……」

「伯父さんの小さい時分にかい？」

「わしの生まれる前だ。わしの父さんの生まれる前だ。お父さんのお父さん、そのお父さんのお父さんの、またお父さんの生まれる前だ……あの歌は昔からあったのだよ。」

〔クリストフは成長し、恋もしました。ある冬の朝、ゴットフリートと今は亡き父の墓に参り、散歩しながら、心の苦惱を打ちあけます。〕

「僕は誓いに背いたんです。」

「希望のぞみをもつのだよ。」

「でも望んだって無駄だったら？」

「神さまにお祈りするさ。」

「でも僕は神を信じないんですもの。」

ゴットフリートは微笑にこりしていった。

「いいや、信じていないならお前は生きて行かれないはずだ。誰だって、心のいちばんの奥底では信じているものだ。祈りなさい。」

「何を祈るんです？」

ゴットフリートは丘の端にまっ赤に現れかかった太陽を指さした。

「お陽さまの出ないうちからお祈りするのだよ。十年も先のことを考えるのはお止し。今日一日のことを考えるのだ。……今に春がきて、立派な地面は目をさますのだよ。お前の心も立派な地面のように辛抱づよくなくちゃいけない。……人はみんな自分で出来るだけのことをしなければならん。Als ich kann 自分にできる限り。」

二人は丘の頂きについた。そして優しく接吻して別れた。小さい行商人は疲れたあしどりで遠ざかって行った。その叔父の後姿を見送りながら、クリストフは黙って立っていた。

「自分に出来る限り……」という叔父さんの言葉が何へんも繰り返された。微笑ほほえみがうかんできた。

*

Als ich kann 私にできるだけのことを。指揮者ケンペも晩年にこの言葉を繰り返しました。ロマン・ローランは死

の年、『ジャン・クリストフ』特別版の一冊の扉に、次の言葉を書き遺しました。

（私にできるだけのことを。）これはソクラテスが好んで繰り返した言葉であった。実に中味の濃い言葉である。

— モンテーニュ

*

お手もとの楽譜〔本文別添〕に見えますように、デュパンは、何個所かの楽節の頭に「ゴットフリートおじさん」とか「クリストフのおじさんとの対話」とか「クリストフは続ける」とか、註を付けています。そこでこの七分間のすばらしいピアノ曲が、いっそうよく判りますように、沖本さんに、二回演奏して頂きます。初めには演奏中、その個所で私が註を入れます。次に再び全曲を演奏して頂きます。では、沖本先生お願いします。

⑧ ポール・デュパン作曲『ジャン・クリストフ組曲』から

「ゴットフリートおじさん」（ゴットフリートおじさんとジャン・クリストフとの対話）

ピアノ独奏 沖本ひとみ

〔追記〕これは、二〇〇三年五月十日、関西日仏学館で開かれた催しの状況に、少し補足したものです。当日稲畑ホールに溢れ、二時間半にわたり終始傾聴して下さい、ロマン・ロランと音楽を愛する皆さんに対し、あらためて感謝します。

（勤ロマン・ロラン研究所理事長・弁護士）

Weihnachtslied (Chant de Noël)

(pour la fin de l'Acte II)

Andante

Schlaf wohl, du Himmels knabe du, schlaf
wohl, du sü - sses Kind! Dich fä - cheln
En - ge - lein in Ruh mit sanftem Him - mels -
-wind. Wir ar - me Kin - der sin - gen
hier ein her - zigs Wie - gen - lied - lein dir.
Schla - fe! Schla - fe! Him - mels -
-söhn - chen, Schla - fe!

「クリスマススの歌」

片山敏彦訳

(スイス、ソリユール地方の民謡)

フランス革命劇「獅子座の流星群」

第二幕の終りに

眠れ神のいとし子、眠れ、うまし子

天つ使いら み空の風をおくりつ

われら まづしき子ら 心こめて集い歌う

眠れ！ 眠れ！ おさな子眠れ！

La terre était dans l'ombre,
 et le ciel était noir. Al! Brûlément,
 dans l'obscurité, Gottfried chanta.
 Il chantait d'une voix faible, voilée,
 comme unidoivre. Jamais Christophe
 n'avait entendu une pareille chanson.
 Lente, simple, enfantine, elle avait
 d'un peu grave, triste, au peu
 monotone, sans se presser jamais! /
 avec de longs silences.

(Jean Christophe: L'Aube)
 R. B.

à Romain Rolland

ONCLE GOTTFRIED

(Dialogue de l'Oncle Gottfried
 avec Jean Christophe)

Paul DUPIN
 1908

Piano

L'oncle Gottfried
 72 *mf*

Jean Christophe
 60 *mf*

rall. *pp* *rall.*

大地はかげり、空は明るかった。——急に、
 夕闇のなかでゴットフリートが歌い出した。
 よわい、おぼろな、いわば内面の声で歌った。
 クリストフは、こんな歌をきいたことがな
 かった。ゆるやかな、シンプルで、無邪気
 なこの歌は、ちよつと重々しく、悲しく、
 やや単調に、すこしも急がずに進み——時
 に沈黙しながら……

ジャン・クリストフ：曙

〔楽譜冒頭の引用文〕

ポール・デュパン作曲
 『ゴットフリートおじさん』
 (ゴットフリートおじさんと
 ジャン・クリストフとの対話)
 ロマン・ロランに捧げる

ロマン・ロラン日記の周辺と出版事情

宮本エイ子

大作家と向き合うとき、わたしはいつも、彼が、その時代に、その社会に、いかに発言してきたのかを問うてみたくなる。日記は、またとない生きた肉声である。

ロマン・ロラン（一八六六一—一九四四）については、第一次世界大戦時の日記は出版されているが、その後のものは、遺言によって死後五十余年封印されてきた。二〇〇〇年に解かれ公開された。

わたしは、その年の秋、保管されているフランス国立図書館（リシュリユ）へ行き、まるでウインドー・ショッピングをするかのように覗いてみた。国立図書館は、シャルル五世の書籍コレクションに遡る。わたしのパリ滞在は正味八日、その間、休館日があるので五日間、終日、日記に向かい合える体力がないので、せいせい二十数時

間割いたのみである。

入館するにはカードを取得しなければならない。顔写真撮影、書類提出、二カ所の面談と日本円で約五千円の手続き料を必要とした。歴史的な貴重な原本、手書きの草稿を扱う宝庫へ立ち入ることが許されるのだから、そのくらの労は当たり前である。

手荷物を預けて、いよいよ目的の場所へ向かう。室内入り口には、止まり木のような高い椅子から見張るおばさん、彼女に入館カードを最終的に預ける。ゴム敷きの木製机、三十席ほどある籐製の背もたれ椅子、それらはすでにほとんど占有されていた。専門家、研究者、学生たちが、水を撒いた静けさのなかでめいめい専心していた。室内は十八世紀の趣を残している。壁面は高い天井

まで立派な皮表紙の本で埋まっていた。その下の引き出しに、ロマン・ロランの日記や草稿がぎっくりと箱に入っているのが窺えた。

部屋の真ん中に坐っている学芸員から、目的の資料を引き出してもらおう。ロマン・ロランの日記は、マイクロフィルムに整理、収録されている。

わたしは、ロランの晩年（一九三八—一九四四）に焦点をあてる。時代はヒットラーやスターリン、そして、日本では軍部の台頭で、太平洋戦争へ突入する第二次世界大戦時代である。そのなかで、身体の弱くなった一人の老人の姿を見ることにもなる。社会的使命を帯びた作家と私人の二つの顔を窓越しに追ってみる。本稿は論文ではなく気まぐれな断章である。

最初、わたしは、マイクロフィルムを映す機械の前に坐っていた。ロランの羽のような筆跡の解説、もとより語学力不足に加えて機械音痴、結局、机の上に移動してすべてのフィルムを手元に置いた。学芸員によるペン書きの項目だけを写し取る作業に切り替えた。さらに、時間の都合で四一年と四二年を抜くことにした。それでも

約三七〇項目あった。交友名、手紙や電報の受信送信、日常の私生活、ことに健康状態、著作活動、社会的活動が記載され、それらがじわじわと伝わってくる。

「誰々が来た。誰々から手紙が来た。返事。ピアノを弾いた。レジスタンスの青年がたずねてきた。パリへ病気の診断のため出かけた。レントゲンを撮った。『ロベスピエール』『ペギー』校正、出版など」

人の名前も、ベルギーの女王からスターリン、ヒットラー、お馴染みのアラゴン、ヴィルドラック、ブロック、クローデル、神父、村役、粉屋や苗木屋まで散見できる。ここでは来訪者、往復書簡者名、日常生活、執筆、出版活動の大部省略。ロランの社会活動の項目のみを列記する。その検証はすでにデュシャトレ氏の著作やカイエシリーズに記載されている。

社会活動

ロランを取りまく情勢は、一九三三年、極右民族全体主義のヒットラーが日本と、日独防共協定を結んだ。共通の敵であるソ連に対抗するためである。これにイタリ

やも参加する。他方、隣国フランスはナチス・ドイツを
 孤立化させる外交政策を試み、各国との個別条約締結に
 努めていた。フランス共産党指導者M・トレーズ(一九
 〇〇―六四)はファシズムの危険を克服するため社会共
 和連盟を創設(一九三五)して、共産党、社会党からな
 る(人民戦線)を提唱、一九三六年、国民投票で勝利し
 た。L・ブルム首班の(人民戦線)内閣(一九三六―三
 七)ができた。ファシズムに反対するロランの日記には、
 M・トレーズの名が、書簡のやり取り、来訪者として頻
 繁に出てくる。ふたりの親交を物語ってしよう。

一九二八年

1月、ソ連邦について、スターリン デイミトロフに

手紙

スペイン内乱

2/20 ヒットラー演説

3/17 ベオグラード青年世界大会、ロランヘインタ

ビュー

3/29―4/2 国際ペンクラブ(ロンドン本部)へメッ

セージ

3/30 モスクワ公判

4/6 ドイツ、オーストリアを併合

4/10 Oscar Hatoch 解放

5/6、7 人民戦線について モスクワ公判について

J・R・ブロックと話す

9/11 反戦、反ファシズム世界委員会へ サイン

9/12 ヒットラー、ラジオ演説

9/14 テールマン委員会へ電報、手紙

ブロックから戦争回避、悲観的情勢の電報

9/24 ヒットラー演説

チェコスロヴァキアから悲観的電報

9/29、30 ミュンヘン協定

F・ゾルダン、J・R、ブロックへ

反ミュンヘン記事

10/4 F・ゾルダンへ手紙

J・マサリクへ手紙

11/11―13 ドイツでのユダヤ人迫害

ダラディエ、ゼネスト失敗

ニヴェール地方の共産党員たちと

フランス青年コミニュストへ

共和制スペイン擁護のアピール

一九三九年

1月 フランス共産党の国民会議へ挨拶

1/29 カタルーニャ崩壊

反戦・反ファシズム世界委員会の国際会議テ

マについて回答

ガンディーへ感謝

イタリアプレス、反フランス報道

スペイン亡命者

3/19 『ロベスピエール』をダラディエに贈る

雑誌「ヨーロッパ」に記事——ヨーロッパの

喪——

3/27—30 アルバニアをファシスト軍占領

4/14 ヒットラーとムツソリーニへ、ルーズベルトの

アピール

4/15 イギリス、フランス 戦争への備え

4/28 ヒットラーの演説

7月 セルジュ、来仏。ソ連について

9/3 ダラディエのアピール。ロラン、ダラディエに

手紙

12/21 ダラディエ ラジオ演説

一九四三年

1、2月 スターニングラード、チュニジア人について

10/19 ラジオ、ロランの死を報道

ヴィルドラック拘束

マルスロ、アルジェリアで拘束

一九四四年

1月 フランス全土 暴力の渦

2月 アルジェ裁判

4/29 パリ爆撃

6/5 アメリカ軍 ローマ侵攻

ヴェズレーのレジスタンス 地方でのレジスタ

ンス

7 / 9 カン侵攻、P・エリオ暗殺

イヨンヌ県の爆撃

8 / 24 - 30 ヴェズレー近郊でのドイツとレジスタンス

の闘い

8 / 25 ヴェズレーでのレジスタンス

アメリカ進撃 パリ解放

9 / 6 トラック運転手たちのパリ状況

ソ連大使館での出会い、ガラディエ宛の手紙に

ついて

11 / 24 ソ連大使館 映画上映

* (共産党党主、一八八六一一九四四・殺害 ナチスによって

囚われた彼の釈放を求めるための手紙・電報)

一九三八—一九四〇年、ガラディエ内閣が発足したが、人民戦線と袂を分けた結果、一九三八年十一月ゼネストが起きた。一九三九年総動員令が下り、ドイツに宣戦布告(九月二日、三日)。

ポーランドへ侵攻したナチス・ドイツに憤慨したロランは、今や阻止できるのはガラディエだとみた。出版し

たばかりの『ロベスピエール』を彼に贈り、ナチス打倒を鼓舞した。

反ファシズムを掲げていたロランは、共産主義のソ連邦に親近感をいだいていた。

ソ連が崩壊したあとに来る、ロランの社会主義におけるソ連観について、果たしてロマン・ロランは、そこに希望と幻想を抱き続けたのか。最大の関心事である。これについては、デュシャトレ氏の講演や著作が示唆に富んでいる。

ゴリキーの死(一九三六)でソ連との対話の手だてを失ったロランは、その後は直接スターリンに手紙、ディミトロフにも手紙を書いてソ連の状況をたずねるが、返事がない。ロランはこうして徐々にソ連に対して世界人類の希望と信じていたことが消滅していくことに気づく。ソ連では一九三六—三八年、モスクワでの度重なる公判が物語っているように、粛清の嵐が吹きすさぶ。八〇〇万人が逮捕され、北ロシアやシベリヤに收容されて行った。一九三九年独ソ不可侵条約が締結されたことで、ロランはきっぱりクレムリンと決別した。

第一次大戦中に書いた『戦いを越えて』をはるかに越える『新・戦いを越えて』をソ連に対して書きたかった。しかし、モスクワにはマリー夫人の子供、セルジュをはじめ親族がいる。家族のため晩年の彼には発言出来なかった。

宗教観

終生変わらないロランの宗教観は、晩年ポール・クロードルとの友情の再開が物語っているように、神父たちとの「キリスト教問答」交流があった。日記には神父たちの名前が随所にあがっている。さらに『福音書』についてのエッセイの記述も見られる。神父らとの往復書簡や『福音書』については、デュシャトレ氏著『最後の扉の敷居』（一九八九）、——日本語未訳——に日記抜粋とともにすべて収録されている。それは、『ユニテ』で村上光彦氏によって随時紹介されている。ロランは結局帰依しなかった。

音楽

ロランが偶像崇拜的なものより一層心酔して身を投じたものは、音楽だった。それは、心の海であった。

晩年の音楽を分かち合う友人は、ウェズレー近郊に住む若い音楽教師リュシアン・ブイエ夫妻であった。彼との親交、往復書簡も出ているが、ロランをどれだけ癒したかが、ほのぼのと伝わってくる。その証のひとつのエピソードをまたもや引用することを許されたい。

ロラン最後のクリスマスの日、『私たちのミサをあげよう』と、いつてロランは傍らのリュシアンに支えられてピアノに向かった。ペートーヴェンの後期ソナタOp.111を弾きはじめた。ロランはその六日後の十二月三十日、息を引き取った。ロラン日記の最後のページ、訪問者の最後の名、ブイエ。「愛の本質」を表現できるのは音楽であり、それこそ不滅であるとするロランにふさわしい。

人生

ロランは一人の人間としていかに生きたか。それはと

りもなおさず、いかに老いて死んでいったかでもある。青春文学のシンボルのように理想化された著者のイメージが日本では強い。今、わたしが彼の老いを見つめていることに戸惑いを覚える人もあろう。

「曙」「燃え立つ茂み」の行く手には、黄昏や暗夜がある。人生の両翼である。川が大海に注がれていくその河口を見る。

日記は、一九四三年から四四年にかけて健康悪化、病氣という文字が頻繁に出てくる。一九九〇年に私はヴェズレーの家を訪ねた。ロランが亡くなったときのまま保存されている寝室で見たものは、彼自身の手で体温記録がメモ帳に残されていた。その時の衝撃的な印象もふくめ雑誌「えひめ」に「ロマン・ロランの旅」として一年間連載したことがある。

ロランは夢を見る。人生の最後、病気で衰弱した熱のあるからだで、まるで、アンネットのように、マリイ夫人、マドレーヌに見守られて横になっている。彼は人生の大河を振り返る。彼の著作活動もすべて遠い幻想の世界へ追いやられていく。確かにあるのは、家族愛、愛で

あると語っている。ソ連に対する第二の『新・戦いを越えて』を書かなかったのも私人として、家族愛を選んだためだった。「愛それはすべてのほじまり……」——『リグ・ヴェーダ』は『魅せられたる魂』扉句を思い出す。

ロランは病床のなか、七十八歳で逝った。一九四四年十二月三十日。

日記日付最終日は、十二月一日、ベルナル神父、アヴァロン助役訪問

モスクワの家族からの近況を待つ

訪問者 グラッセ、マルスロ、ブイエ。

ロラン・晩年のシルエットが透かし模様のレースのように目の前に立っている。社会に対する良心を問いつつに大きな存在、わたしはその重みをクリストフのように感じながら、日記のページ「おわり」と記されたところへ目を遣った。目的の品物をケースのなかから取り出せなかったものの、それでもわたしは、大事なセレモニーをなした感慨に包まれる。日記の全コピーを学芸員に依頼してきたが、未だに回答はない。

一九六八年、マリー夫人がロラン展のため、来日した。本国フランスにも存在しないロマン・ロラン全集が日本で刊行されていた。愛読書にロランをあげる人がフランスに比較するまでもなく大勢いる。ミリオンセラーを続けるなかで、彼女と翻訳者宮本の間で、ロラン晩年日記の一部を日本語訳して出版するはなしが進行していた。「本国フランスで公開されていないものを日本で先にすること」に、当時の駐日フランス大使が疑問を呈した。夫人は態度を一変した。

ロラン夫人来日から、三十年以上経たが、皮肉なことに、今日、日本では、ロラン読者の激減で、ロランの本の出版は悉く困難に遭遇している。翻訳者は一九八二年に、夫人は八五年にそれぞれ世を去った。ロラン晩年の日記に、老いて生きるヒントを見いだそうと希求していた晩年の宮本のが、わたしの脳裏を横切る。

昨年十月、東京でロマン・ロランと標題の付いたエッセイが出版された。その出版社に、わたしは多くの読者があるかどうか尋ねた。社長は答えた。「本は売られるものではなくなっている。朝日新聞の全国版で第一面

の書籍広告欄に広告を出したところ、百冊売れた。広告代金は××円、こういう状況です。出版社では出版費用も、ましてや広告代金など一切出せません。こういう本を出したいと思いつけてきたものがお金も出ず。ロマン・ロランに限らず今の出版界は、広告料金の一割還つてくるのが現状ではないですか」ロマン・ロラン研究所も、その朝日新聞の広告を見て一冊買ったことを伝えておいた。

いずれ、遠くない日に、ロランの日記はフランス国立図書館で発行され、インターネットで見られるようになるだろう。関心のある者だけが読めばいいのである。時代は動いていく。舞台は回る。

参考文献

デュシャトレ著・編『ロマン・ロラン——最後の扉の敷居で——』（一九八九）、『モスクワ紀行』（一九九二）、『ロマン・ロラン・リュシアン&ヴィヴィアン・ブイエ 往復書簡 一九三八—一九四四』（一九九二）、『思想と行動』（一九九七）、『あるがままのロマン・ロラン』（二〇〇二）以上日本語訳未刊。『どこからみても美しい顔』（一九七九）、『ユニテ』一一—三十号。

（朝日新聞・ロラン研究所理事）

『京都・半鐘山の鐘よ 鳴れ!』(宮本エイ子著) を発行

編 集 部

二〇〇三年十二月十八日、京都地方裁判所で工事差し止めの画期的な仮処分決定が出されました。しかし、半鐘山の樹木は、すべて伐採されたあとでした。今は一本もなく無残な姿となっています。その間の状況をご報告いたします。

工事が一年以上停止していたが、二〇〇三年お盆明けに、工事再開され、樹木伐採工事が始まった。住民は抗議行動をし、同時に、京都地方裁判所に工事差し止めの仮処分申請を提出。住民との話し合いのついていないことを知った請け負業者大谷建設が開発工事から撤退。工事はされず、昨秋は山の緑と紅葉が保たれていた。

師走になって、突然、工事が再開。「住民と話し合い

もせず、木の伐採をしないで!」と、施工業者幸田社長に中止を強く求める。弁護士作成の工事中止を求める通知書を、新たな請負業者洛西建設工業と京都市長に提出。京都市は「開発許可を出しているので強制的に中止させることは出来ない」との姿勢をくずさず。樹木伐採工事はどんどん進んでいった。十二月十八日、京都地方裁判所で仮処分「工事続行中止」の決定がついに下りた。

半鐘山の樹木はすでにすべて伐採されていた。「土地の形質の変更、(同土地に生育する樹木の伐採・枝打ちを含む)を行ってはならない」の主文が樹木の命を救えなかった。山の形質はかろうじて保たれているのがせめてもの慰めである。

出版記念会が「半鐘山を守る会」の女性たちによって、二〇〇四年一月二十四日、リーガロイヤルホテル京都で開催されました。(一二二名参加)

尾辻善司理事長のことば

半鐘山は〈へなぎさ〉である。

『京都・半鐘山の鐘よ 鳴れ!』が執筆、出版されるに当り、著者は新聞インタビューで「半鐘山は〈へなぎさ〉です。」と語っていました。これは実にみごとな表現です。ほんらい、波の寄せては返す〈へなぎさ〉が間にあってこそ、山と海とは共に美しく生きているのです。東山と私たちの街との間も同じです。〈へなぎさ〉はまた生と死との境い目です。沖繩の海岸を囲るコバルトの水の帯、それより沖があゝの世です。ロマン・ロランは『魅せられたる魂』に次のように書いています。

「なぎさで拾った、水のしたたる貝殻に耳をつけてごらん! ひとつの世界が泣いている。死にかけているけれど、そこには、もう、みどり児の泣き声が聞こえる

ね。」

私は甲子園浜の〈へなぎさ〉と海を守るため、行政に対する戦いを七年、埋立を止める訴訟を五年続け、〈へなぎさ〉を守りました。半鐘山の〈へなぎさ〉は、樹木を殺されても復活します。美しい山と私たちの街とを生かす、この半鐘山を、みんなで守りましょう。

* 読者の反響 抜粋

……京都地裁の工事中止決定は喜ばしいニュースではありますが、無惨な姿をさらしてしまった半鐘山はもはや以前の姿を取り戻すことはできません。ここ数年、京都は至る所でこうした暴挙を許してきました。クロードルが讚えた京都は、今や消え去ろうとしています。しかし、このままでは京都が京都ではなくなってしまう、そうした思いに駆られるのは、むしろ京都の外側にいる人たちの方です。十二章を読んで、その感を深く致しました。京都の人自らが声をあげ、アクションを起こしていかなければならぬわけなのですが……

……読んでみて、第一に宮本さんはじめに若草四姉妹の一生懸命さが心を打ちました。

法律と利害に護られた開発行為。そこに対抗する手段は、付近住民の快適追求へ、ただ持ち合わせた常識と情感だけ。

あれよあれよ、という間もなく、ことは進展し、留まるところをしない。

ジャンヌダルクのような勇氣。一評も、むべなるか、とも感じます。

開発業者の幸田さんを描く筆致にユーモアが漂い、役所の役人の仕方なさにはウィットが流れました。

圧巻といえは、審査会での宮本さんの陳述。明快、簡潔に肺腑をえぐり、まさまさ主張を結晶。見事です。……

……文学分野から社会分野へのご転身と表現してはいけなにかも知れませんが。ロマン・ロランがそうであり、宮本正清先生がそうであられたように、あなたの本領が発揮されたお仕事かと存じます。本来はそうあってはならないのに、私も文学研究者は、長年の間文庫のみを相

手にしてしごとをしています。対象は「人」ではなく、

印刷された、抽象的な「資料」です。それに反して貴書が成るまでに、どれだけ多数の人々との出会いと、折衝と議論があり、それらの記録が成されたことか、しかもそれが、「世界遺産 銀閣寺の緩衝地帯」という具体的な「地域」を対象とし、しかもその地域の住民によって実現されたかと思うと、目を洗われる思いが致します。……

……私は永年、行政法、就中行政手続法、行政訴訟法を専門にしてきましたので、その具体的な運用、適用を係争地の付近の立場からヴィヴィッドに描いていられる部分は、誠に有益で参考になります。……

……業者や市当局との対応、議員との交渉、地元住民との話し合い、新聞記者への要望、ついに、フランスでのユネスコ世界遺産センターへの依頼、行政訴訟、工事差し止め仮処分申請、と、素人の女性の懸命な取り組みにほんとうに感動しました。……

……本書には誰をも傷つけずに、大切な文化遺産を守りたいとされる純粋なお考えが満ち溢れ、ドキュメント作品として、二十一世紀の新しい文学の形と思想のようなものが感じられ、よい勉強になりました。……

……通読して、半鐘山に限った話ではなく、京都全域に、グローバルに、これからの環境問題について、人々がどのように考えなければならぬか、問題提起の貴重な一文だと思えます。……

……こみ入った運動の内容まで、思わず引き込まれて読み進んでおります。某新聞社の記者との対話など考えさせられること多く……

……都市計画法と世界遺産条約という、「国内法と国際法」の狭間を問題提起とする主張は大変意義深い。歴史都市京都の環境保全と国際的観光都市形成を国家的規模の事業としたいと訴える京都市長の姿勢の矛盾が問われる。……

……よくぞ書いてくださったとほんとうに感謝です。というのも読んでみてつくずくと他の運動、たくさんありますが、例えば御池通りのけやきの保存運動とか、二条通りのマンション反対運動、そしてポンデザール橋の問題など、どれも大体同じ京都市の反応であり、同じあしらい方をされ、同じような業者の欲得があり、ある時はなだめられ、ある時は脅され、痛快に思ったのは、ああいう記者の……中傷を記録されたこと、ああいった嫌な思いを運動された方々がどれだけ味わわせられたかということを私は知っていましたから。どの運動も大体同じ経過を辿ったことを思い出してしまいました。ポンデザール橋を除いては、ほとんどよい結果はなく、多くの人の挫折と失望が残されてしまったのが現実です。宮本さんのされた克明な調査と経過の記録は、誰もできなかったことですし、多くの人が共感し、励まされ、今後の希望になったことかと思えます。……

……運動の現実がフィクションをはるかに凌駕して読者に迫る。歩みを記録しておく重要性とともに、日本の各

地で同じような運動を展開しつつある、あるいは問題を抱えている人々にとって大切な指針となる……

法の不備や行政考える教材に

請願や訴訟 克明につづる

東山連峰の鐘岡寺山支那にあたる通称「半鐘山」(京都市左京区)の開発問題で、里山の緑を求めて環境運動を続けている住民が、これまでの経過をまとめる本を出版した。突然の開発通告に戸惑った住民たちが、請願や行政訴訟などに取り組んだ経過を市民の貴重な感覚でつづり、京都の町と自然のかわりや環境行政のあり方を問いかけている。

「半鐘山と北白川を守る会」メンバーの同区議員(反対に立ち上がった)里山、業者の開発申請に対して、京都市は許可を出している。現在、住民は市を相手取り開発許可取り直しを求めて提訴する一方、開発工事の一時止めを申し立て、先月、京都市が工事の一時停止を決定している。こうした運動に加え、

里山の緑が京都の町にいかにか重要か考えるシンポジウムを開催や世界遺産・鐘岡寺の緩衝地帯としての大切さをユネスコに訴えたことなど、さまざまな視点で考えられた活動を逐明に記している。

「京本」は「半鐘山は市街地と自然の成り立ちが守れないと自然環境保全法の本備や四捨五入を考える教材」と本にした。「一定の段は千八百坪で法蔵部から全頂の書店で発売する。

半鐘山保全運動を本に

左京の守る会メンバー

「半鐘山と北白川を守る会」メンバーの同区議員(反対に立ち上がった)里山、業者の開発申請に対して、京都市は許可を出している。現在、住民は市を相手取り開発許可取り直しを求めて提訴する一方、開発工事の一時止めを申し立て、先月、京都市が工事の一時停止を決定している。こうした運動に加え、

里山の緑が京都の町にいかにか重要か考えるシンポジウムを開催や世界遺産・鐘岡寺の緩衝地帯としての大切さをユネスコに訴えたことなど、さまざまな視点で考えられた活動を逐明に記している。

京都新聞 2004年1月20日

京を讀む

半鐘山宅地開発の工事 反対訴える奮闘の記録 住民目線で克明につづる

左大臣の墓所(寺)の墓所(寺)近くにある通称「半鐘山」。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

左大臣の墓所(寺)の墓所(寺)近くにある通称「半鐘山」。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

左大臣の墓所(寺)の墓所(寺)近くにある通称「半鐘山」。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

◆「京都・半鐘山の鐘よ 鳴れ!」世界遺産「阿含寺」の歴史地誌「半鐘山」シリーズ「第2巻」イ・主編 伊藤弘人ロマン・ロン研究所発行、法政経典社1日1000円＋税

京都 半鐘山の鐘よ鳴れ!

伊藤弘人(編者)の監修

宮本 エイチ

ロマン・ロン研究所



毎日新聞 2004年 2月26日

緑の「半鐘山」守りたい 住民活動の経過を本に

京都・銀閣寺の西側に「半鐘山」といふ小山がある。宮本さんの自宅の奥に、こんな山が。これ、半鐘山。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

京都・銀閣寺の西側に「半鐘山」といふ小山がある。宮本さんの自宅の奥に、こんな山が。これ、半鐘山。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

テーブルトーク

「京都・銀閣寺の西側に「半鐘山」といふ小山がある。宮本さんの自宅の奥に、こんな山が。これ、半鐘山。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

「京都・銀閣寺の西側に「半鐘山」といふ小山がある。宮本さんの自宅の奥に、こんな山が。これ、半鐘山。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。この山には「半鐘山」の山名がある。

(田中京子)

朝日新聞 2004年 3月11日

ロマン・ロラン研究所の活動

一九七二	5・15	ロマン・ロランと日本の青年(映画『ロマン・ロラン』上映)	宮本 正清	一九八九	中国文学とロマン・ロラン	相浦 杲
一九七二	11・27	苦悩のなかのインド	森本 達雄	一九八九	ロマン・ロランの反戦思想と現代	加藤 周一
一九七三	6・24	ロマン・ロランとフランス革命	波多野茂弥	一九九〇	ロマン・ロラン全集と私	小尾 俊人
一九七三	5・26	ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心にして	高井 博子	一九九〇	ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命二〇〇周年の記念に	中川 久定
一九七四	12・18	私の人間観	末川 博	一九九〇	ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽	尾埜 善司・今江 祥智
一九七六	6・29	私の通った芝居の道	毛利 菊枝	一九九一	ロマン・ロランとガンディー	新村 猛
一九七六	12・5	ロマン・ロラン没後三十周年記念——講演と音楽の夕べ	佐々木妻夫	一九九一	『魅せられたる魂』と私	森本 達雄
		演奏：玉城 嘉子		一九九一	占領時代における日本社会とロマン・ロラン	樋口 茂子
				一九九一	ロラン・片山・ヘッセ	小尾 俊人
				一九九一	ロマン・ロランと私	宇佐見英治
						松居 直

6・4	ロマン・ロランとベートーヴェン	青木やよひ	尾埜 善司・今江 祥智
9・27	ロマン・ロランとデュアメル	村上 光彦	中野 雄
10・25	ロマン・ロランの思想の二面性	兵藤正之助	神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動の あいだ
11・29	初めにロマン・ロランあり	岡田 節人	B・デュシャトレ
6・26	〈大洋感情〉と宗教の発端	岩田 慶治	ロランとフランス革命
9・25	ロマン・ロランとイタリア	戸口 幸策	自然科学とゲーテ
10・30	ロマン・ロランの革命劇をめぐって	鶴見 俊輔	ロマン・ロランとドイツ音楽
11・27	宮本正清 没後十年記念追悼会		——ベートーヴェン、デュカ他作品
	ピアノ演奏…山田 忍		ピアノ演奏…小坂 圭太
一九九二	静かにやさしき顔	佐々木斐夫	おはなし「ピエールとリュス」と「また逢う日ま で」
1・29	不思議な静けさ——宮本正清の世界	小尾 俊人	今江 祥智
一九九三	自伝的諸作品について	佐々木斐夫	映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)
1・29	ロマン・ロランの演劇的世界	石田 和男	ロマン・ロランと日本人たち
5・24	ガンディーとロマン・ロラン	山折 哲雄	私の歩んだフランス文学の道
6・23	『魅せられたる魂』を語る(前)	重本恵津子	ロマン・ロランとR・シュトラウスの周辺
10・15	『魅せられたる魂』を語る(後)	重本恵津子	岡田 暁生
一九九四			ロマン・ロランとの出会いから
1・28	いま、ロマン・ロランを語る		レクチャーコンサート
			岡田 暁生
			鄭 承姫

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 10・30 | ロマン・ロラン記念コンサート
ピアノ演奏…小坂 圭太
レクチャー…岡田 暁生 | 12・21 | ロマン・ロランとウィクトル・ユゴー
神谷 郁代 ベートーヴェンを弾く”
デイディエ・シッシュュ |
| 9・25 | ロマン・ロランと政治的魔術からの解放
柳父 閉近 | 6・23 | 財団法人ロマン・ロラン研究所設立三十年記念コンサート
神谷 郁代 |
| 6・8 | ロマン・ロランと種時く人
柏倉 康夫 | 10・13 | ロマン・ロランと（老いの豊かさ）
青木やよひ |
| 一九九八 | ロマン・ロラン記念コンサート
チェロ演奏…小川剛一郎 | 二〇〇一 | シンポジウム
今井 祥智 |
| 6・6 | わが青春と一生
岩淵龍太郎 | 12・1 | ロマン・ロランとインドの精神
森本 達雄 |
| 9・19 | ロマン・ロランと結核の時代
福田 真人 | 二〇〇〇 | ロマン・ロランとベートーヴェンを弾く”
お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」
園田 高弘 |
| 10・4 | ピアノとチェロのための夕べ
ピアノ演奏…北住 淳 | 10・8 | 日本ロマン・ロランの友の会五十年記念コンサート
園田 暁生 |
| 11・18 | ベートーヴェン…ピアノソナタ 第21番、28番
ピアノ演奏…北住 淳 | 11・25 | ロマン・ロランと大佛次郎
村上 光彦 |
| 一九九七 | 「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン
本山 美彦 | 10・17 | 「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと
區 建英 |
| | 魯迅 | | 園田 高弘 |

二〇〇二

4・20

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート

ヴァイオリン演奏…ピエール・イワノヴィッチ

ピアノ伴奏…郁子・イワノヴィッチ

11・11

ロマン・ロランの後継者たち

蜷川 譲

二〇〇三

4・19

ロマン・ロラン記念スプリングコンサート

演奏…ピエール・イワノヴィッチ

郁子・イワノヴィッチ

5・10

ロマン・ロランの作品による音楽とレコード

尾埜 善司

5・31

戦争と平和、科学を考える

ブリーモ・レーヴィを語る

ピアノ演奏…沖本ひとみ

ジル・ド・ジエンヌ

解説 西成 勝好

11・22

ロマン・ロランを読みながら 今の世界を考える

峯村 泰光

財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために、喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感
いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

二〇〇三年度 賛助会員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別会員

青木やよひ 有馬通志子 蘆田ひろみ 安藤 知子
 安倍 道子 シッシュ・D・由紀子 遠藤 静香
 五島 清子 濱田 陽 福田 真人 福井 友栄
 福田万紗子 古家 和雄 *本郷美智子 林 次郎
 日野二三代 北条 文子 池垣 勇 石原 和子
 *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄) 今江 祥智
 今井 多代 今本満善枝 井土 真杉 伊砂 利彦
 乾 昌明 岩坪嘉能子 神谷 郁代 梶本 智美
 加藤 澄子 狩野 直禎 清原 章夫 喜多 寿子
 河田 厚公 岸田綱太郎 熊木 秀雄 小牧 久時
 近藤 脩 近藤 正雄 増田ひとみ 峯村 泰光
 松居 直 宮内 幸子 村山香代子 村松 敏
 水谷 敬子 森内富美子 森本 達雄 中西 明朗
 森本 博子 *宮本エイ子 森久 光雄 村上 光彦
 松井 菊恵 西村七兵衛 西村喜代子 西原久美子
 永田 和子 能田由紀子 西成 勝好 野村 庄吾
 乗金 芳子 小尾 俊人 小田 秀子 折田 忠温
 大出 學 大川起示子 奥 和義 奥村 一彦

*尾埜 善司 大谷 史朗 岡部 素行 大谷佳世子
 李 珣淑 *佐々木斐夫 *三友居(山本 勝)
 坂谷 千歳 佐久間由紀子 佐久間啓子
 島谷 亜希 清水 憲一 志賀 鍊三 下郡 山
 杉本千代子 鈴木 文代 須知真由美 田中阿里子
 田代 輝子 田間 千晶 多田 淳子 富田 武
 竹本 浩典 徳永 勲保 谷口けいこ 長 美穂
 馬木 紘子 上原 徳治 梅原 ふさ 氏家 玲子
 和田 義之 山下 雅子 山本 信子 八木美佐子
 柳田 基 山下 真子
 ヴァンチュール・ミシエル 柳父 閑近

短 信

理事の永田和子さんが『評伝 片山徳治』を四月に出版（高知新聞企業・発行・発売）しました。片山徳治は日本ロマン・ロラン友の会の初代委員長片山敏彦の父です。自由民権運動の植木枝盛と親交があり、科学者寺田寅彦の主治医でもありました。

連絡先 千七八〇―八六六六

高知市本町三丁目二―一五

(Tel 〇八八―八二五―四三三〇)

あとがき

米軍の侵攻から始まったイラク戦争が始まって一年になる。ブッシュ大統領の戦争宣言はいつのことだったか。誰の目から見ても占領状態が続き、文明の衝突といわれる戦争は終わっていない。不幸な泥沼状態は深まってくばかりである。

このような絶望的な世界状況の中で、ロランならどう考えるだろうかと思うことがある。

「自由をもつ人の数は、幾世紀このかた、けっして多くなかったし、また、群集心理という大波に押されてむしろ少なくなっていくかもしれない。

それはどうだっていい！ 集団的熱狂に酔っ払って怠けきっている大多数の人々のためにこそ、この自由の炎を絶やしてはならないのだ。

真実をくまなく探し求めよう、それを摘み取ろう、花であっても種子であっても、見つかるかぎり何処でも！

そして、それを天空の風に向かってばら撒こう！
どこから飛んで来ようと、どこへ飛んで行こうと、かならず芽吹くにちがいない。

この広い世界、心を育てる沃地に事欠くことはない。」
『先駆者たち』から

私たちは平和に対するいかなる絶望的な状況にあろう

とも、なお希望をもって知の沃土を耕していきたいと思
う。

本号で取り上げているピエール・ジル・ド・ジエンヌ
さんは、二十世紀のニュートンと呼ばれるノーベル物理
学者であるが、西成さんが企画、編集されたものである。
心から感謝する。

峯村さんと尾埜さんの玉稿もどちらも講演会からの再
録ではあるが、同じようにご本人によって加筆、修正さ
れたものである。

一九九八年から生じてきた半鐘山は私たち研究所にとっ
ては身にふりかかってきた環境問題であると同時に、私
たちの精神が問われているように思う。今回、宮本さん
の著書を研究所で積極的に発行したのも、その意義を感
じたからである。

すでに七年目を迎えた問題は、まだまだ楽観的にはな
れない。今後とも強い意志をもって、この問題をとりあ
げていきたい。

文責 野村 庄吾

(編集部)

小尾 俊人	野村 庄吾
西村七兵衛	宮本エイ子
清原 章夫	能田由紀子
濱田 陽	

ユニテ

第三十一号

発行日

二〇〇四年四月三十日

発行者

(財)

ロマン・ロラン研究所
理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所

(株) 北 斗 プ リ ン ト 社

URL <http://www2u.biglobe.ne.jp/~rolland/>

E-mail rolland-miyamoto@mtf.biglobe.ne.jp

ピカソ作『七月十四日』上演舞台の幕（1936.8）（本文44ページ参照）

PABLO PICASSO

La dépouille du Minotaure 1936, rideau de scène de la pièce "Le 14 Juillet" de Romain Rolland

©2004-Succession Pablo Picasso-SPDA (JAPAN)